
罰則（連載版）

紫 暮盤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罰則（連載版）

【Nコード】

N1387S

【作者名】

紫 暮盤

【あらすじ】

人を信じることが出来ないトラウマを持つ主人公ミチル大学3年生（男）が駅である大学生の女の子と知り合いになりその子と関わることを通して変わっていく。

ミチルはミチルはその日も駅前でギターで弾き語りをしていた。女の子は言った。「あなた歌嫌いなのか？」

「え？」ミチルは意味が分からなかった。

■第1章 始まりと過去（前書き）

以前短編で書いた「罰則」をエピソードを増やして連載版にしました。主人公を大学4年から3年などすこし変更はしましたがおおむね同じです。時間の許す方読んで頂けるとありがたいです。

■ 第1章 始まりと過去

■ 第1章 始まりと過去

10月のはじめのある夜。その日もいつもと変わらない夜であった。星は出ていたが薄い雲で覆われていた。ただ秋の夜の少し冷えた風の流れて季節の移り変わりを通行人がなんとなく知る。変わらない薄ぼんやりとした駅の風景。そして雑音。市の中心部から少し離れたその駅はそこから帰宅する人々も疎らだった。

ミチルはその日も駅前でギターの弾き語りをしていた。

アコースティックギターからこぼれるその音はその駅の雑音の一つとして溶け込んでいた。

ミチルが演奏していると後ろから一人の女の声が聞こえた。

それは小さいが雑音に潰れない透る声だった。

「おっ、君は今日もひとりかい？独りぼっちはさみしいね。」

ミチルはこの言葉にドキリとして思わずリズムを崩してしまった。

「別に好きで一人で・・・」

言いながら振り返ると同じ大学生くらいの女の子がしゃがみこんで野良ネコに話し掛けていた。

ボブヘアの似合う女の子だった。

「（泣いてる？でも誰だろう。知り合いではない。）」「ミチルは思った。

「あつ、ごめんなさい。あなたに言ったんじゃないでこの猫ちゃんに・・・」ミチルに気付いた女の子が早口で言った。

猫は足早に逃げていった。二人ともその猫を目で追った。

「いやごめん、オレも勘違いしたみたいで・・・」

ミチルは気まずく感じとつさにそう言った。

そしてその後少しの沈黙が流れた。

すると女の子が口を開いた。

「ねえ、あなた歌嫌いなの？」

「え？」ミチルは意味が分らなかった。

ギターを持って駅で歌ってる人間が歌が嫌いなのは知らない。

何かの罰ゲームで歌ってる様に見えたのだろうか。

いやそんなはずはない。

ミチルはそう思った。

「いや。好きだけど。ロックとか。」ミチルは答えた。

「そうなんだ。」女の子は意外そうに答えた。

「ごめんなさい。なんか邪魔しちゃったね。じゃ。」

そう言っただけで女の子は歩いて行った。

「（変な子だったな。意味分かんないし。猫と話せるのか？）」「ミチルは思った。

ミチルはまた弾き語りを始めたがどうしてあんなこと聞かれたんだろっという疑問はその日ミチルの頭の中からは消えなかった。

次の日の夜、ミチルはまた同じように駅前でギターを弾いていた。するとミチルに話掛ける声があった。

昨日の女の子であった。

「こんばんわあ。ギターのお兄さん。ねえ、お兄さんアレ誰か知ってる？」

「アレ？」

ミチルは妙な違和感を感じながら言った。

そしてミチルは気付いた。

「（この子飲んでるな（汗）。）」

結構なアルコールの匂いがしていた。弾き語りなどやっていると酔っ払いに声を掛けられることもある。相手をするのは慣れている。

あまり関わらず話を聞き流すのが一番だと自分の中で決めていた。

「あのさ、さっきコンビ二で流れてたんだけどさ、外人で”ソーサリキュウエー”って歌ってるやつ。」と女の子は話を続けた。

「あーそれね。たぶんオアシスってバンドの曲だよ。」ミチルはあえて愛想良く答えた。

「そうなんだ。いいよね。あの歌。さすがギターのお兄さん!。」女の子は典型的な機嫌のいい酔っ払いの口調で言った。

「(ギターのお兄さんって・・・なんだこのフレンドリー感・・・(汗)昨日と全然感じ違うし・・・)」ミチルは早めに会話を終わらせようと思ったが頭にあの事がよぎった。

昨日この女の子に言われた言葉であった。

“あなた歌嫌いなのか?”

ミチルはその言葉がどうしても頭から離れなかったのである。実際今日も何度も思い返してしいた。

寝たら忘れるだろうと思っていたが今日になってもミチルの中で何か引っかかっていた。

「あのさ昨日オレに歌嫌いなのかって聞いたよね?」ミチルは思い切って尋ねた。

「うん。」

「どうして?」ミチルはまた尋ねた。

「そうねえ。あなたがギターのお兄さんには見えても歌のお兄さんには見えないから。かな。」女の子はさっきと同じ口調で言った。

「は?」ミチルはそのよくわからない答えに拍子抜けした。自分は昨日からあんなに考えていたというのに歌のお兄さんやギターのお兄さんなどよくわからない曖昧な回答が返ってきたからであった。

そして女の子は人差し指でミチルの眉間の方を強く指差しながら続けて言った。

「てかあなた人をホントに好きになったことないでしょ?そんな気がするわ。」

「あ、あるよっ!」ミチルはその行動に少し驚いたがそれよりも反射的にそう答えた。

ミチルはちよつとムキになってしまったと後悔したが大学に入って付き合ってきた7、8人の女の子の事を一瞬考えた。

「そ？じゃあたしの聞き間違いかもね。」女の子がサラリと言った。
「あたしは音楽の事はよく分からないんだけどさ。昨日あなたの歌声を聴いてとても、なんか悲しいカタマリみたいのを感じたわ。映画で言えばロバート・デ・ニーロのやってたフランケンシュタインみたいな。歌で題を付けるなら『そうね』愛をください”って感じ？。」

「それか“僕は誰も信じません！”みたいな？。でもロックってそういうのも大事なんですよ。たしかなんかの雑誌に書いてあった記憶が。」女の子が斜め上に視線を向け、自分のアゴを人指し指と親指で挟みながら言った。

それは推理小説で探偵が最後に犯人を言い当てる場面の様にミチルには映った。

「・・・・。」ミチルは言葉が出なかった。逃げ場のない殺人犯の様であった。

電撃が体中に走りまるで真つ白な光線で心の中を丸見えにされた気分だった。

ミチルにはある過去があった。

今から7年前ミチルは大きな大会を控えた中学2年生のサッカー部だった。

その日はミチルの地元には珍しく雪が降り少しではあるが積もっていた。

「ミチル・・・お前呼ばれてるよ。」

ミチルが部室で着替えてると同じクラスの今井がボソツと言った。

「だれに？」ミチルが答えた。

「いいから来て。隣のB部室。オレ呼んでくるよう言われたただだから・・・。」

妙な雰囲気を感じたがミチルは隣のB部室に行ってみた。
サッカー部は人数も多いため部室がA部室とB部室とある。

A部室は主に上級生がB部室は下級生が使うのが慣例だった。

B部室の方がはるかに広かったがほぼ道具置きがメインでA部室と比べるとキレイとは言えない部室であった。

薄暗いB部に室入るとなぜか学校の不良グループの新庄がいた。

新庄は学校1番の不良として認識されていたがケンカが強いのに合わせて蛇のようにしつこい。怒らすと何をされるかわからない。

だからみんな関わりたくないのだ。しかしそれが新庄を助長させているのか自分が一番だと言って学校での行動をエスカレートさせていた。

何をしでかすかわからないタイプで先生達も触らぬ神に祟り無しといった感じになっていた。

ある先生は注意したら車のボンネットを金属バットでボコボコにされた。大人の事情で先生の泣き寝入りとなったようであるが真相は誰も知らなかった。

ミチル達がガムを持っていただけで烈火のごとく怒る生活指導の先生も新庄が廊下でガムを噛んでいても注意すらしない状況だった。

そんな新庄がなぜ関係のないサッカー部の部室にいるのか。

ミチルにはまったく理由がわからなかったが何か良くないことがあるのは確かだというのだけは感じ取っていた。

B部室には新庄の噛んでいるガムの香料とつけているキツイ香水の匂いが充満していてミチルは少し顔をしかめた。

ミチルを見て新庄が口を開いた。

「お前らサッカー部さあ、俺の文句言ってるらしいじゃん。」知っているぞと言わんばかりの高圧的な言い方だった。

「何のこと？」まったく意味がわからないといった表情でミチルはすぐに答えた。

「田辺から聞いたんだよ!。」部室にいやな感じの大声が響いた。見ると薄暗い部室の隅に田辺がいた。昨日まじめに練習しない態度を注意したサッカー部の後輩である。練習にも平気で遅れて来るし、やる気も見られない。ミチルは人に注意などあまりするタイプでは

なかったが昨日は田辺の不注意から同級生がケガをしそうになった。それで言っておかなければと注意したのである。

この田辺は新庄の不良グループと最近仲良くし始めていた。

「（態度を注意した腹いせか。）」ミチルは思った。

田辺はミチルと目が合わない様に視線を壁に合わせる様にして立っていた。

「昨日の帰りに”新庄みたいな不良は死んでほしい”って確かに言っていました。」田辺がボソツと言った。

ミチルはそれを聞いて思い出した。

「（中井と木田だ。それ言ってたの。）」

中井と木田はサッカー部のキャプテンと副キャプテンで部の中心的存在だがかなり人の悪口を言う癖がある。

昨日も帰りに部室で着替えてる時、新庄の事をいろいろと悪く言っていた。

いつもミチルは中井と木田のそんな話に加わるのが嫌で話に参加することは無かったがもしかしたら昨日木田と中井のやり取りを隣のB部室の田辺が聞いたのかもしれない。

部室と言っても薄いプレハブで音は筒抜けであつた。会話なんてすぐに聞こえてしまう。

「俺はそんなの言つてないよ。」ミチルがきつぱり言った。

「じゃあ誰が言つたんだよ！」ミチルにゆっくりと顔を近づけ般若の様な顔で新庄が凄んだ。

「誰かは知らないけど。」ミチルは目を合わせたまま言った。

「じゃあサッカー部のやつ全員ボコる。とりあえず次木田呼んでこい。」新庄がかなり苛立った表情で言った。

「（今井がオレを呼びに来たのはこういう流れだったのか。）」ミチルは思った。

「待つてくれよ。問い詰めても誰も怖くて口割らないだろうし、もしかしたら聞き間違いかもしれないしさ。」ミチルは言った。

木田は犯人だが今井の様に次の人を呼びに行く行為自体が”友達を

売る”様に思えたからであつた。同じ部員としてそんなことはしなくなかつた。いろいろと各自問題はあるが今まで一緒に頑張つてきた仲間だ。ミチルはそう思つていた。

「はあ？呼んでこいや！コラ！」

「いやだ。」ミチルはそう言つと同時に殴られていた。

ミチルはよろけた。

顎と口の内側にジンジンとした痛みを感じた。口の端を指で拭うとかなりの赤い色がついた。口が切れたんだと分かつた。今まで部活で転んで擦り剥いたり、包丁で指を誤つて傷つけるなどして傷からの血を見る経験はあつたが殴られて自分の血を見るなどみんなと平和にやつてきたミチルにとって初めての経験であつた。そんなものは映画やテレビドラマでしか見たことが無かつた。

自分の手にべつとりついた血に対してミチル自身多少驚きはあつた。しかしその時のミチルにとつては流血などよりもこの目の前にいる、自分の部の部員たちを脅かすであろう悪に対しての怒りの方が勝つていた。

ミチルはキツと新庄をにらんだ。そして拳に力を込めた。

ミチルは部活で鍛えている。ミチルは今までケンカなどしたことは無かつたがたとえ新庄であろうが勝てるかは分らないが一方的に負けるなどとは思わなかつた。

しかしミチルはその握つた拳の指を開いた。

もちろん殴り返そうと思えば出来た。

しかし昨年陸上部の男子が喧嘩で大会出場停止となつていたのが頭をよぎつたのであつた。

「なんだお前？喧嘩もできんのか？根性ないのぉ！！」新庄の前蹴りでミチルは後ろの棚に激突しその勢いで木製の古い棚板達はバリバリと大きな悲鳴をあげて壊れた。中に入れてあつた昔サーキットトレーニング用に使つていた三角コーンや誰かの使い古したスパイク達が長年溜まつたホコリと共に無残に投げ出され、床に倒れこんだミチルの上に転げ落ちた。

そしてにやけながら関節を鳴らす新庄のパンチや蹴りでミチルは十数分間サンドバック状態となった。薄暗い部室で汚い罵声と重いものが壁やドアにぶつかる振動、激しく叩きつけられる椅子、壁やドアに跳ね返るボール達の音が絶え間なく続いた。流血とホコリまみれになりボロボロのミチルは床に倒れこんだが絶対に新庄のいう事には従わなかったし殴り返しもしなかった。

そして先に体力が尽きたのは新庄の方のようであった。

殴られる方はもちろんダメージで体力は消耗するが殴る方も常にフルスイングなので体力は減る。

「ナメやがってこのクソが！！絶対お前から口割らせるからな！！明日待つてろよ。」

新庄は床に倒れこんでいる汚くヨゴれたミチルに捨て台詞と噛んでいたガムを吐いて部室から出て行った。

そして田辺も。

田辺はそれ以来部活にも来なくなったがその出て行く田辺がチラリとこちらを見た横顔がうす笑っている様にも見えた。

ボタンとドアが閉まりミチルはゆっくりと起き上がった。そして体の痛むところを押さえた。顔を触ると試合後のボクサーの様に腫れているのが分かった。

横腹もミゾオチも背中も痛い。服が足跡だらけだ。

しかしそれよりも親になんて言おう。ホントの事言ったら心配するだろうし。ミチルはそう思った。

しかしミチルはこの行動に後悔はしていなかった。

ゆっくりとドアを開けてB部室を出ると薄暗い部室から出たせいか部室の前に少し積もった雪がやたらと白く輝いているように見えた。ミチルはしっかりとA部室のドアノブを握りドアを開いた。ドアを開けるとミチルは少し驚いた。もうすぐ練習開始時間だというのに木田と中井がいたのである。二人はミチルの腫れた顔のことなどには何も触れようとしなかった。しかし顔が引きつっていたのは確かだった。

おそらく隣のB部室でのやり取りは聞いていたはずだ。ミチルはそう思った。

ミチルは丁度いいと思い今回のいきさつを改めて二人に話そうと口を開いた。

「実はさつきさ、新庄がさ・・」ミチルがそう言った瞬間

「知らないよ！。お前の問題だろ。」木田が言った。

「オレ達関係ないから。」中井が言った。

そう言い放って二人は急いで部室を出て行った。

「（え！？・・。）」

ミチルは一瞬意味が分からなかった。

「（どうして・・。）」

「（まさかそれを言うただけに二人は残っていたのか？。）」

それ以外の答えはどうしても不自然で自分自身に違うと説明しても納得させることができなかった。

「（今まで自分が信じていたものって・・一体なんだったんだろう・・。）」

しばらくミチルはその場に立ち尽くした。

そしてその時、ミチルは昔出会ったある不良に言われたある言葉を思い出した。

それは去年の夏祭りにミチル、木田、中井、川田、吉川というクラスメイト5人で行った帰りのバスでの出来事だった。

そのバスはミチル達の他に誰も乗客は無く、バスの最後部のシートにゆったり5人で座ってその日あった面白かったことなどを話して騒いでいた。

するとあるバス停から偶然隣町の不良二人組が乗ってきたのである。瞬時にミチル達の会話は止まった。

その二人組は見るからに図体も大きく高校生くらいはある体格で真正銘の不良だった。

二人組の不良はすぐにミチル達小さな五人に目がいった。

「お前らオレらと喧嘩せいや！」

すぐにその二人組はミチル達5人の前を塞ぐように座り因縁をつけてきた。

とても重い威圧のある声だった。

ミチル達は5人とはいえ中1の小さな身体。

相手は2人とはいえ向こうの方が強いのは明らかだった。

ミチル達は恐怖しながらも当たり障りの無い会話でなんとかやり過ごそうとしていた。

そしてミチル達が降りる予定2個前のバス停にバスが止まった瞬間だった。

バタバタバタッ！

バスの床が走る足音で鳴った音だった。

木田と中井と川田の3人は座席を飛び越えて走って逃げていったのである。

ミチルと吉川の2人は何が起こったか分からなかった。

しかしすぐに取り残されたという事実だけは理解出来た。

「けっ！シヨボー奴らが！」不良の一人が自分が座っている一つ前の席の背をドンと勢いよく蹴りながら言った。

そしてバスは何事も無かったかのようにまた動き出した。

ミチルと吉川はまずい事になったとお互いの顔を見合わせた。

するともう片方の不良がポツリと言った。

「お前から置いてけぼりくらったな・・・」

それから降りるバス停までミチルはその不良達と少し話をした。

というより不良達が意外にも気さくに話してきたのだった。

もちろん話題はその不良の好きらしい格闘技やアイドルであったが、そしてミチル達が降りるバス停でバスは停車しミチルはその二人組

みの不良に別れを言った。

すると不良の一人がミチルに言った。

「おいお前。ダチはダチだからダチなんだぜ。」

その時は何事も無く無事に帰宅できたことで特に気にも留めて無かったがその言葉が今になって強くミチルの頭に思い出されたのであった。

開いたままの部室のドアから入り込む冷たい風。

その冷風でミチルはハツとした。

鼻の奥と切れた口の内側からの止まらない血が垂れてきていた。

ミチルは誰もいなくなつたA部室の外に出ると口一杯に溜まつたそれをさつき見た白い雪の中にブツと吐き付けた。薄く積もつた白い雪の中のミチルの血は白と赤のコントラストを作り悲しくもミチルには鮮やかに見えた。そしてミチルはそのコントラストをしばらくジツと見つめたままだつた。

次の日の昼休み、新庄がまたミチルを呼び出した。ミチルは殴りこそはしなかつたが今度は激しい取っ組み合いになつた。それを見かけた女子が先生達を呼んで事が公となつた。

その後いろいろと事情聴取じみたことが行われたが結局誰が新庄の文句を言つたとか言わなかつたとかそこら辺は迷宮入りにしたままミチルと新庄はもうお互いに手は出さないということで一件は決着ということになった。

「これからは何かあつた時はちゃんと私に相談しなさい。」

そう部の顧問の先生に言われたが、明らかに殴られて血のにじんでる昨日のミチルの顔を見て、ミチルが言つたボールが当たつたという言い訳の方を選んだ人に相談なんてしてもホントの解決なんて無理だとミチルは思った。

その事件以来、ミチルが美術で描いた絵にガムが付けられるなどちよつとした不良からの嫌がらせはあつたもののそれ以外はミチルに對して特に変わった事は何もしてこなかつた。

しかし変わったと言えばミチルの方であつた。表向きの理由は受験勉強に専念したいからというものであつたがミチルはあの事件以来

部活には行かなくなった。顧問の先生の計らいで在籍扱いにはしてくれたがミチルにはもうそんなものはどうでも良かった。

時間は流れ、中学3年の冬の受験シーズンが過ぎ、春になった。そしてミチルも高校生となった。

勉強に打ち込んだ甲斐もあったのかミチルもそこそこの通った進学高に入学できた。

予想以上の進学校合格にミチルの両親も満足しているようだった。

ミチルは喜んでいる両親を見て少し嬉しく思った。

でもミチルは高校で部活なんてやろうなどと思うことは一度も無かった。

そして高校時代ミチルは何もしないまま何もないまま過ごした。

思い出なんて特になかった。

ただ流れる時間を過ごした。

そして大学受験となりミチルも大学を受けた。

一人暮らしが出来る地方の小さな大学を。

ミチルは誰も自分を知った人がいないところへ行きたかったのである。

そしてもう一つ。

あることを始めたかったからである。

それは『音楽』であった。

実は唯一高校時代ミチルを支えてくれたものがあった。

それが音楽だった。

中でも洋楽のロックバンドの曲を聴いている時が一番の至福の時だった。

音楽は裏切らない。

ミチルはそう思った。

誰も知っている人がいない大学で音楽を始めて新しい自分に新しくスタートを切りたい。

心の中でそう思っていたのだ。

だから面白くも無い受験勉強にもなんとかやる気が出た。

その甲斐あって希望通りの国立の大学へ進学できた。

みんなからはなぜその成績であえて地方に行くのかと不思議がられたが。

そしてミチルは大学へ入り文字通り新しいスタートを切った。

軽音サークルに所属しすぐにバンドを結成した。

刺激的な毎日だった。

みんな音楽に熱い。

ミチルはボーカルとしてオルタナティブロック系バンドを組んだ。

ピストルズみたいな感じで男が集まるような攻撃的なバンドにしよ
うとみんなで話して盛り上がった。

ピストルズやニルヴァーナなどのコピーバンドとして学内外でイベ
ントライブをこなして行く度ミチルの声と激しいパフォーマンス性
もバンドの個性となり人気も出た。

そしてミチルも大学2年となりそれぞれのメンバーの演奏レベルも
上がった。

そして今度はオリジナル曲をやることになった。

ミチルは今まで書き溜めていたオリジナルの歌詞と楽曲をみんなに
見せそれをベースに編曲を行った。

すぐに21曲が完成した。

感じとしてはレイジアゲインストマシンの様なヘビーな音色伴奏
にグリーンデイの様なキャッチーなメロディイメージのミクスチ
ャーパンク系のバンドスタイルだった。

大学3年になる頃にはどのライブハウスで演奏しても客は満員のソ
ールドアウト。

ワンマンライブをやるまでになった。

激しいパフォーマンスと過激な歌詞でライブ中は喧嘩やケガ人も当
たり前に出た。ライブハウスからクレームなども多数あったが地元
では名実ともに超人気のミクスチャーパンク系バンドという位置付
けとなった。

ミチルは充実を感じていた。
これが自分の求めていた幸せだと。
音楽は一生懸命弾けば必ず同じように鳴ってくれる。
努力と時間を費やせば必ず答えてくれる。
求めても去りはしない。
最高の友であると。

しかし事態は一転した。

それはメンバーからの突然の解散の申し出であった。

「お前は音楽に対して熱すぎる。学生バンドなのにそこまで要求しないでほしい。付いて行けない。」

「オレはもつと楽しくやりたいんだよね。人気のビジュアル系から誘われててさ。」

「毎回ライブの度乱闘起きるのも勘弁。客も過激過ぎてなんかヤバイし。」

確かにここまで軌道に乗ったのは”ミチルの音楽に対して求めるもの”がファンに激しく受け入れられたからではあるがそれはいつしかメンバー全員の総意ではなくなっていたのである。

「そんな・・・」ミチルは驚きを隠せなかった。

みんなで向かっていたはずのゴールがミチル一人のゴールになっていたのである。

いつの間にかみんな別の方向を向いていたのである。

ミチルはみんなを説得したが無理だった。

長い時間かけてここまでみんなで作り上げてきたのに。
バンドとしてここまで息が合うメンバーはいないと思っただけにミチルは落ち込んだ。

しかしこうなったら新メンバーを集めよう。幸い楽曲は自分が作ったものがあるのだから。ミチルはそう思った。

元々人気バンドだったため新メンバーはすぐに集まった。それは全

て大学外のメンバーだった。
そして新メンバーで再活動を始めようとした。

しかし直後異変が起きた。

突然ミチルの声が出なくなっただのである。

出なくなっただとは高音部分で普段の生活には支障はないがミチルの作った高音を大きく出す曲は歌えないのは確かだった。

医者診断は最終的に原因不明で特定出来ないというものであった。原因が分からない。強い高音部分は声はかすれて出ないという現実だけが残った。とりあえずリハビリを続けるしかないという事であったが治るという確証はないと言われた。

ミチルは求めていた音楽に対して自分の身体がギブアップしてしまったことを情けなくも思った。

声の出ない自分を忌々しく思った。

もちろんバンドは空中分解した。

そしてミチルは何をしていいか分からなくなった。

そうして季節は春から秋になりもう今は10月になった。

ミチルの声はまだ出ないままだった。

ミチルはリハビリも兼ねてここ2週間くらいこの駅前で軽い弾き語りをしていた。ミチルにとっては弾き語りをしたいというよりも外にいた方が気が紛れるという理由の方が強かった。ミチルにはこの少し寂れた駅前の雑音が自分の気持ちを少し紛らしてくれるように感じていたのである。

弾き語りをしていると、解散したバンドを知っている人達からは幾度となく声をかけられたが聞かれるのは何故解散したかだけだった。

ミチルはハッとしてフラッシュバックした過去の記憶から現実に戻った。

そして目の前にいる女の子にさっき言われたあの言葉を思い出した。

ミチルは何か言わなくてはと思った。

「あんたおれの何知ってんの！？酔っぱらいにはデリカシーってのも無いの！？」それがミチルから出た精一杯の言葉だった。しかも怒鳴ってしまった。

「あーデリカシー無くて訳わかんなくてすみませんでした！だからあたしはダメなんですよっ！。」女の子はカチンときたのかそう言っただけで走って行ってしまった。

「（あゝどうしてあんなこと言ってしまったのだろう。しかも女の子に怒鳴るなんて最低だ。）」ミチルは思った。

偶然だろうが自分の心を見通されたような言葉に、ミチルは自分を守るのに必死になったのである。

ミチルは自己嫌悪に陥った。

それから3日間ミチルは駅には行かなかった。

またあの女の子に遭遇するのを心の隅で恐れていたからだ。

その次の日、いつもと時間をずらして夕方駅に行った。

駅はいつも通りの風景だった。疎らに歩く人々に暇そうに待つタクシー。そしていろいろな音が混ざって聞こえる雑音。ミチルは何か少し安心感を覚えた。

そしていつもの様にギターを弾こうと腰を下ろそうとした。

その瞬間ミチルは後ろから左腕を強く捉まれた。

「！？」

ミチルが振り向くと、あの女の子だった。

「あ！」ミチルは驚いた。

「やっと見つけたわ！。」女の子は言った。

女の子はミチルを見つけて走ってきた様で息を弾ませていた。

「え？」

「あなた22時までここにいるよね？ね？いるよね？」女の子が早口で言った。

「え？まあ・・・」ミチルは曖昧に答えた。

「じゃあ絶対ここで待ってて！。お願い！」そう言つて女の子はまた駅の改札の方へ走つていった。

ミチルは訳がわからなかった。

自分と会いたくないだろうと思つていた女の子が自分を見つけて待っていてくれというのである。

「（怒られる？）」「ミチルはそうも思つたが自分が怒鳴つたことは謝らうと思つたのでとりあえず待つことにした。

「（22時つてあと5時間もあるな（汗））」「ミチルは思つたがとりあえずいつもの弾き語りを始めた。

すると一人の駅員がミチルのそこへやつてきた。

すると駅員はミチルに言つた。

「君どこへ行つてたんだい？2、3日見なかったけど。」

見知らぬ駅員がミチルに話しかけてきたのだ。ミチルは少し驚いた。

「え？はあちよつと。いろいろありまして（笑）」ミチルは造り笑顔で答えた。

「じゃあ今日はやつと大丈夫みたいだね。まったく。」駅員は苦笑いしながら去つて行つた。

駅員がなぜミチルに話しかけてきたか謎だった。

今までそんなことは一度も無い。

何が大丈夫なのだろうか。誰か自分の演奏を聴いている人でもいるのか？ミチルは持つてきたアコースティックギターで好きな曲の間奏部分を弾き始めた。

ミチルは何か考えたい時や考えがまとまらない時よく曲の間奏部分を繰り返し弾いた。

ミチルは曲の間奏部分をひたすら繰り返し弾いていると自然と心が落ち着いて考えがまとまったり新しいアイデアが浮かんだりするのだった。それは弾き語りを始めてから気が付いたことである。間奏部分というサビへの橋渡しの静な構成場所を繰り返し弾きながらふと顔を上げるとその繰り返しフレーズが作り出すうねりが歩道を歩く人のリズムや鳩の飛び立つ羽音まで全ての雑音を一体化し

たように感じさせミチルにある一定の静かな落ち着いた感覚をもた
らすのであった。それはミチルが無意識の内に合わせているのかも
しれないただの錯角なのかもしれない。しかしそうすることでミ
チルは自然と心が落ち着き冷静に物事を考えることができた。

5時間という時間は長いがそうやってミチルはギターを弾きながら
”あの子になんて謝るのが一番いいだろう”とかあの女の子の不思
議な行動のいくつかを考えていると意外に22時は早くやってきた。
そしてまたしても息を弾ませた女の子に腕を捉まれて今が22時で
あることにミチルは気が付いた。

「ごめんなさい。今日バイトどうしても遅れられなくて。」女の子
が言った。

またしても走ってきたのだろうか。ミチルはそう思った。ミチルは
少し気後れした。

「あ、あたしパン屋でバイトしてるんだ。これバイト先の残り。も
らい物だけど。よかったらあげる。」女の子はそう言ってパンが5
6個入った袋をミチルに渡した。

「あ・・・ありがとう・・・」

ミチルは意外なプレゼントに驚きながらも一応お礼を言って受け取
った。

そして怒ってはいなかったようだど少し安心もした。

「あたしずっとあなた探してたんだけど。あれからあなた駅来なく
なつたでしょ。」女の子が話を続けた。

「え？あ、たしかに・・・」

「ごめんなさい！」ミチルが言い終わらないうちに女の子がそう
言って深々と頭を下げた。

「え？！あ、いやオレの方がごめんなさい。怒鳴っちゃってさ。」
とつさにミチルも謝った。

「いいの。あたし思ったことすぐ言っちゃうのが悪い癖っていうか
そんな感じだから。この前あなたの事知ったような事言っちゃって

それからあなたを駅で見なくなったから。謝ろうと思つてたの。」
そう言つた女の子の声にとても爽やかなものをミチルは感じた。

「いやオレの方が悪いよ。ごめん。てか探してたつてマジで？」ミチルは何かつながる言葉を探し女の子に訊いた。

「探すつて言つても学校とバイトあるからバイト前後駅をちよつとだけどね。駅員さんにもちよろつと聞いたりして。」女の子が少し笑つた。

ミチルはその時はじめて駅員が話しかけてきた理由がわかつた。しかし駅員の言い方からして”ちよろつと”ではない気がした。ミチルは申し訳なさと同時に遭遇を避けていた自分が恥かしくなつた。

「そうなんだ。オレ2、3日ちよつと用事あつたからさ。ありがとね。」ミチルはもらったパンの袋を見つめながらウソをついた。遭つのを避けてたとは口が裂けても言えなかつた。

ミチル一人とても気まずい気持ちになつた。
ミチルがふと下に目を遣るともらったパンの入つた袋に紙が入つてゐるのに気付いた。

それはレシートだつた。パンはバイト先の余りではなくバイト先でお金を出して買ってきたものではないのか。ミチルは思った。そしてさらに何か申し訳ない気がしてならなかつた。

「あのさ、良かったら一緒食べない？なんかたくさんあるみたいだし。」ミチルはもらったパンの袋を指差した。

そして二人はイスと同じくらいの高さの座るのに丁度良いロータリーの縁石に腰掛けてパンを食べながら少し話をした。

「あ、オレ名前清水ミチル（シミズミチル）。ミチルて呼ばれてるからミチルでいいよ。」

「へー。君ミチルつて言うんだ。女の子みたいでかわいいね。」

「だからあんま気に入つてはないけどね。あゝ君名前聞いてもいい？」

「ごめんあたし自己紹介もしてなかったね。田中千尋。千尋でいいよ。」

そうして二人はお互い自己紹介した。

二人は同じ年であること、

千尋はミチルの大学の隣の女子大であること、

ミチルと初めて会った日千尋は彼氏にフラれた帰りだったことが分かった。

「（だから猫に独りぼっちとか話していたのか）」ミチルは妙に納得した。

独りぼっちはミチルでも猫でもなくて千尋は自分のことを言っていたのだ。

そして失恋話で友達とかなり飲んだ帰りが二回目に出会った時だったことがわかった。

浮気した彼氏に新しい彼女について問い詰めると変な事をべらべらしゃべらないデリカシーのある子と言われたのが自分と逆でショックだったらしい。

そついうこともあってミチルに謝ろうと探したのもあるようであった。

ミチルは何かいろいろと話が繋がった気がした。

しかしミチルは自分の事をほとんど喋っていなかった。

なぜミチルがあんなに怒鳴ってしまったのかも。

しかしこの千尋という子はそついうのは特に気に留めていないようだった。

二人は特にアドレス交換などはしなかったがすぐに仲のいい友達になった。

いつも千尋のバイトが終わるくらいに丁度ミチルは駅で弾き語りをしていたのでミチルと千尋はよくロータリーのいつもの縁石に座って話をした。

大学のことバイトのこと。

好きなお笑い芸人のこと。

ハリウッドスターは誰が好きかなど。

話題は何でも良かった。

何も気を使わず話すことができた。

千尋はミチルの名前が女の子みたいだからと言ってよく男性口調の低い声を出して「ミチルちゃん」と呼んでミチルをからかったりした。

千尋は自分でそれを「ナイスガイ口調」と呼んでいたがミチルはそれで呼ばれるのを嫌がった。そしてそれをまた千尋がからかった。しかしミチルはこういう関係も悪くは無いかもしれないとも思っていた。

大学へ入って付き合った女の子も何人かいたが体だけの感情しか抱かなかった。

そういうものに虚しさを感じてはいたがそういうものなのかなとも思っていた。

しかし千尋のように会話だけでこんなに楽しいと思う相手は初めてだった。

ミチルにとって自分自身をつつみ隠さない性格の千尋はとても新鮮に眩しく見えた。

しかし心の影を持つ自分には眩し過ぎる存在にも感じ始めていた。自分とはまったく違う世界の人間にも見えて仕方なかったのである。

それから何週か過ぎたある日の夜。

いつものように駅の縁石で二人は楽しく話をしていた。

話も一段落すると、ミチルはおもむろにギターを取り出しオアシスというバンドの Don't look back in anger を弾き語りで歌った。

以前千尋が「誰が歌っているのか」とミチルに聞いてきた曲であった。

千尋は神妙な面持ちで聴いていた。

歌い終わるとミチルが言った。

「感想は聞かなくても分かつてる・・・。実はさ・・・。」ミチルはそう静かに言々と自分の過去のことについて千尋に話し始めた。中学の部活でのこと、音楽を聴く以外何もなかった高校のこと、大学で始めたバンドと解散と自分の声のこと。

そして自分の歌声から千尋に全てを見抜かれたと思ったこと。全てを話した。

とても暗い話ではあると思ったがミチルは全てを話した。千尋に自分を知って欲しいと思ったのだ。

そして話してしまわなければ何か心苦しいという気持ちもあった。

長い話が終わると今度は長い沈黙が訪れた。

その場所にはいろんな音が混じった雑音があつたがミチルはお互いの息が聞こえるくらい静かに感じた。

しばらくして千尋が口を開いた。

「じゃあミチルはホントに誰かを好きになったことないんだ。」

「・・・たぶん。」ミチルは自分の汚れたスニーカーを見つめながら言った。

「じゃあ好きって言った事もないんだ。」

「・・・うん。」ミチルは言った。

「なんかそういうの苦手ってか恥ずかしいしさ・・・。」ミチルは少し弁明するように続けた。

「だろうね。」千尋が言った。

「だろうねって・・・。」ミチルが聞き返すように言った。

「だろうねだからだろうねよ。」

「は？意味がわかんないよ!。」ミチルが言った。

ミチルはまた意味のわからない曖昧な返答だと思った。自分はまじめに話しているのに。ミチルは千尋にそう言おうと思った。

その時突然千尋は縁石を立った。

ミチルは急に立ちあがった千尋を見上げた。

そして千尋は縁石に腰掛けているミチルの唇にそっとキスをした。

それは10秒くらいの長い時間だった。

ミチルは何が起こったかわからず目を開けたままだった。

今初めて見た目を閉じた時の千尋とその長いまつ毛をただじっと見てしまっていた。そして感じた事のないゆっくりとした時間の流れをミチルは感じた。

そして千尋は少し首を傾けて言った。

「意味わかったかな？ミチルちゃん。」いつものナイスガイ口調で千尋が言った。

ミチルは急に恥ずかしくなった。そしてからかわれたと思った。

「は？！わ、わかんねーよ！！」ミチルは言った。

「じゃ、わかるまで続けようか？ベイビー。」千尋がまたナイスガイ口調で言った。

「いいよ！もう。」ミチルは強く言った。

それを聞いて千尋は笑った。

「ミチル、手出して。」

そう言っただけ千尋はミチルの手首を掴むと手の甲を上にした。

「何？」ミチルは言った。

「マジックだよ。」千尋が答えた。

「手品？」ミチルが訊いた。

「そう。油性のね。」千尋はそう言っただけ自分のバックから油性マジックを取り出した。

「マジックってペンじゃん！？まさか・・・」

「動かないで！このドリトル千尋におまかせあれ！」

「おいっ！」

「ちょっと動かないでって言ってるでしょ！」

千尋はミチルの手の甲に油性マジックで字を書いた。

『この人はチヒロの彼氏です。』縦横まっすぐな綺麗な字でそう書いてあった。

「何これ？（汗）」ミチルが言った。

「ハートも入れる？」千尋が軽く答えた。

「いやいいよ（汗）！」

「てか何これ？」

「だからあなたは私の彼氏です。てことだよ。」千尋がまた軽く答えた。

「え?!いつから!？」

「今から。」

「どうして!？」

「いやなの？」

「いや・・・いやじゃ・・・ないけどさ。」

「じゃあいいじゃん。あ、携帯貸して。」

千尋は赤外線機能を使い自分でアドレスを交換した。

「さみしい時はいつでも電話していいぜベイビー。」

千尋はミチルの肩をポンと叩きいつものナイスガイ口調でそう言つて帰っていった。

ミチルはしばらくポカンとしていた。

ミチルは狐につままれるどころか撥られたような何とも言えないな感覚であつた。

■第2章 ギターピック

それから2週間が過ぎた。その日の夜も千尋のバイトが終わってミチルと千尋はいつものように駅のロータリーの縁石に腰掛けて話をしていた。

「ねえミチル、もし今この瞬間ここに宇宙人が襲ってきたらどうする？」千尋が言った。

「どうするってそんなのありえないし。」ミチルが言った。

「だから言ってるでしょ、もしもの話だって。どうする？ミチル」

「じゃ、まあとりあえず戦うかな。でも地球に攻めてくる宇宙人ってくらいだから科学も進んでるだろうしオレ達なんて簡単に殺られるんじゃないかな。」

「おっ、戦うんだ。」千尋が興味深そうに言った。

「まあ・・・ね（汗）」

「ならばこのチヒロめもミチル姫と共に戦いましょう！この命、燃え尽きるまで！」千尋がナイスガイ口調で言った。

「なんでオレ姫なんだよ！」

「いいじゃん。ミチルって名前なんだしさ。姫にピッタリ。」そう言って千尋は笑った。

ミチル達の会話はいつもこの様な感じであった。

あのキスをした次の日、千尋は何も変わらずいつもと同じであった。そのいつもと変わらない千尋の様子は昨日の事はもしかしたら何かの夢だったのではとも一瞬ミチルに思わせたが手の甲の油性ペンの跡が現実であるということをミチルに再確認させた。

二人は彼氏と彼女の関係にはなったが今までの関係と特に何も変わりはなかった。千尋のバイトが終わる22時くらいに駅で逢い仲良く話をする。以前と特に変わらない関係であったが少し変わったと言える二人が電話やメールでも連絡を取るようになったという事であ

った。もちろんそれは圧倒的に千尋の方からが多かったがそれによりミチルと千尋の距離は以前よりも近くなったのは確かであった。

しかしミチルの中で1つのある思いは消えていなかった。

それは千尋はなぜ自分なんかに好意を持ってくれているのだろうという疑問であった。

千尋は確かに少し風変わりなところはあるが性格もいいと思う。

客観的に見ても綺麗な顔をしているしスタイルも良いし服だって今風でオシャレだ。

雑誌なんかの街角スナップに載ってたとしても別に不思議な気はしない。

別にわざわざ自分でも・・・ミチルはそう思っていた。

ミチルも大学に入ってそれなりにカワイイ子達とは付き合ってきたがそれはバンドがあつての事だと自分でも思っていた。

人気バンドのヴォーカルと言うだけで向こうから勝手にやってきた傲慢の彼氏の役目は彼女を飾り付けるアクセサリーでしかなかったがもちろん自分もその恩恵にあやかっていたので文句は無かった。

人気バンドのヴォーカルでも無ければ人を信じるような心も持たない今の自分に千尋が好意を持ってくれているのがミチルには不思議でならなかった。

「ねえミチル、オソロイの携帯ストラップとか付けちゃう？」千尋が笑いながら言った。

「やだよ。そんなカッコ悪い。」ミチルは即答した。

「そお？あたしは気にしないけどなあ。」

「こつちが気にするよ。てかオレあるし。ストラップ。」

そう言つてミチルは自分の携帯のストラップを見せた。

「何それ？」千尋はその白い物体が何か尋ねた。

「これはさ、グリーンデイって外人バンドのギターピックだよ。」

ミチルは自慢げに言った。

「ふーん。」

「ふーんって・結構貴重なんだけどなこれ（汗）。これはさあ、オレが高校の時初めてバンドのライブってものを観に行った時ゲツトしたお宝なんだ。そのライブさ会場の全員が叫んでんの。一体化してるっつーか。それ見てさ音楽のパワーってすごいなあってマジドキドキしたよ。何かホント初めての感覚っつーかさ。オレも絶対バンド始めたいって思ったんだ。でそんな時ギターボーカルのビリーが投げたこのピックをホント偶然キャッチしたんだ！ダイレクトだよ。丁度席が5列目で近かったのもあるけどね。」

「へー！」千尋は目を輝かせた。

「そう、だからこのギターピックはオレのお守りとしてそんな時からずっと携帯のストラップにしてるんだ。みんなからはせっかくの記念ピックに穴あけてもつたいないって言われるけどお守りは常に持っていないとねって思ってたさ。だから切れないようヒモの代わりに極細のチェーンにしてるけどね。」

ミチルは自分の携帯と白いギターピックを繋ぐ細いがしつかりしたチェーン部分を見せた。

「なるほど。わかるそれ！あたしもお守りみたいの持ってるもん。」

「そうなの？」

千尋はそう言うとうちのバックに付けたキーホルダーを見せた。

それは小さなLEGOブロック製のキーホルダーで映画スターウォーズの悪役キャラクター『ダースベイダー』だった。

「あたしさ高校入ってすぐ大事な腕時計失くしたことがあったんだ。入学祝いにプレゼントされたやつ。家のどこ探しても無いの。自分の部屋も居間も洗面所も服の中も。両親は学校じゃないのかとか言っただけで自宅ですっきまで付けてたのは確かだったの。」

「で一週間探しても無かったの。あきらめかけて落ち込んでた時、友達が映画の試写会当たったって言って連れて行ってくれたんだ。スターウォーズ。スターウォーズ知ってる？ミチル」

「男ならみんな知ってるよ。」ミチルは笑って言った。

「それでね。試写会でなんとダースベイダーが来てたのよ。あの黒いやツ。」

「へー。」ミチルは興味深げに言った。

「そしたらダースベイダーがあたしにキーホルダーくれたの。このLEGOブロックのベイダー。」

「マジ!?!。」

「なんかすつごくうれしくてさ、で家に帰ったらなんと腕時計も見つかったの。あれだけ探して無かったのに。」

「犬小屋の中にあつたんだって。たぶん庭で落としてうちの犬が犬小屋に持つてつたんだろうって。」

「それであたしさ、なんかあのダースベイダーにキーホルダーもらったから時計が見つかった様な気がしたんだよねその時。ほら映画でさ、宇宙人に遭遇した人が不思議な石を貰ってさ、それ以来その石の周りでいろんな奇跡が起こるって映画があつたじゃん。あんな感じ。だからそれ以来このダースベイダーをあたしいつも持ち歩いてるんだ。」

「これ、あたしは『奇跡のベイダー』って呼んでるけどね!。ちなみに他にもいくつか奇跡を起こしてるんだよ。」

「へえ〜。」ミチルは少し苦笑いしたが千尋らしいなとも思った。

「そしてこれが発見された時計ね!ほらっ!」千尋は自分のしている腕時計をミチルに見せた。

「え?」ミチルは思わず二度見した。

「あれ?どしたの دونالد 嫌い?」千尋が言った。

それはデイズ二ーの دونالد ダックの両手が針になった腕時計だった。

「(似たようなミッキーのやつを中学の時女子が持ってたような・・・)」ミチルは思った。

「ミチルちゃん、あなた今これをちよつと馬鹿にしたでしょ。」

千尋がそう言つてミチルにしかめっ面をした。

「おじいちゃんが高校入学の時プレゼントしてくれたんだ〜。ミッ

キーじゃなくてDonaldってチョイスがニクイでしょ。でもおじいちゃん寿命でそれからすぐ死んじゃったけどね。」

千尋は最後の方は少し言葉をにこした。

「あたしんち共働きでさ。学校帰りいつも近所のおじいちゃんちに帰ってて。まあ典型的なおじいちゃんおばあちゃんつ子だったんだよね。おじいちゃん映画が好きで家にいっぱいビデオもあったし。」
「形見みたいなもんなんだ。じゃあ・・・。」ミチルは申し訳なさそうに言った。

「まあね。でも気に入ってるから付けてるんだよ。さすがにベルト部分はもう変えたけどさ。」千尋は笑顔で言った。

「そっか。」ミチルも微笑んだ。

しかしミチルはその時自分の中でハッとした。

それは微笑んだ自分と同時に千尋という人間に嫉妬している自分にも気付いたからであつた。

ミチルはいろいろと千尋が話してくれる話を聞いて千尋のことを何か大きな澄みきった海のようにも感じていた。

それはミチルの持つていない、水溜りのうちに既に枯れ果ててしまったものだ。

何も間違わずに正しく綺麗な心で生きてきた人。ミチルにはそう思えた。そして今の自分が人として欠落している様にも感じ何か悲しい気持ちにもなるのであつた。

もしこの人に『誰かを好きになるとはどういう事か』と聞いたら即答してくれるような気もした。

もしこの大きな海に裸になって溺れることができたのならばもしかすると自分も心が浄化されて変わることができるのかもしれない。もしかするとそうなのかもしれない。ミチルはそうも思った。

しかし自分自身がそれを恐れているのもミチルはわかっていて。自分はなんて臆病な心なんだろう。

一方でそう思うミチルもいた。

自分と千尋は全てが違いすぎる。

自分の過去の事は千尋に全て話しはしたミチルではあったがそれだけに今の黒い影の様な心の自分に、真つ白な心の千尋はじきに呆れて去って行ってしまうのではないだろうか。

ミチルの中には自分の様な人間のもとからたとえ千尋が去ってしまったとしてもそれは当然であるという気持ちがあり、またその一方でそうになった時のことを考えると心を全て開くことが怖かったのである。

誰か人を信じるなんてとつくに止めていた自分に大丈夫だ人を信じると急に言っても完全には信じきれない恐れている自分がいてそれをミチルは情けないとも思い自己嫌悪にもなった。

でも今はいろいろと考えるのは止めて千尋との時間を過ごそう。今はそれだけでも楽しいのだから。
ミチルは毎回そう思うのであった。

「そう言えばミチル君、何か気が付きませんか？」ふいに千尋が言った。

「え？いや・別に。」

さつき別の事を考えていたミチルはいきなり質問されたのでとっさにそう答えた。

「はあホント。ミチル君はなあ。」千尋は足をブラブラさせて言った。

「あつ、ブーツ？」ミチルは言った。

「正解！！」

「これね、前からほしいなって思ってたんだけど昨日見たらバーゲンになっててさ。丁度バイト代入ったから思い切って買っちゃったんだ〜！どう？似合う？似合う？」千尋がうれしそうに言った。

「うん。似合うと思う。」ミチルは言った。

ホントに似合ってるなとミチルは思った。

上品な茶色の革で出来たロングブーツは千尋の細く長い足をさらに格好良く見せた。

「でしょ？あたしもそう思うんだ〜このブーツはあたしが指紋をすり減らしてパンを売りまくった血と汗の結晶なのだよ。ミチル君。」
千尋が演劇口調で言った。

「カッコいいよ。」ミチルは褒めて言った。

「カッコいいって言葉が聞きたかったんじゃないんだけどな〜。」
千尋が呆れた口調で言った。

「まあまあ。ほらなんか雨も降りそうだし。そろそろ帰ろつか。カッコいいブーツ濡れたらやだろ?。」ミチルが笑って言った。

ミチルは雨が降りそうな微妙な夜空を見上げた。

「傘あるから大丈夫だぜベイビー。」千尋が傘の先で軽くミチルをこずいた。

そしてその日もいつものように駅で反対方向に二人は別れた。

時刻はもうすぐ0時になるうとしていた。

ミチルは自分のアパートへの帰り道をゆっくり歩いていた。そして歩きながら千尋も普通に女の子なんだなとちょっと前のやり取りを思い出していた。

ミチルが家路への3分の1くらいの距離を来た時、小雨が降ってきた。

ミチルは持っていた傘をさそうとした時、ふいに携帯を地面に落とした。

しまった。とすぐに拾い上げたがミチルはあることに気付いた。

ストラップが無いのだ。

あのギターピックのストラップが。

「（今まで落としたことなんて一度も無かったのに。」

ミチルは辺りを戻りながら探したが見当たらなかった。

ミチルは千尋に電話した。

千尋もまだ帰ってる途中だった。

「あのさ千尋、さっき駅で別れる時オレ携帯ストラップ付いてたかとか覚えてる?」ミチルは焦りを押さえながら言った。

「どうしたの?無いの?!」

「まあ……。帰る途中で気付いたんだ。どかな？覚えてたりする？」
「あつたような無かつたような……。ごめんちよつと定かじゃない。あたしも探すよ！」

「いやいや大丈夫大丈夫！。もう遅いし雨も降ってきてるし。オレも明日朝駅とか探そうと思ってるから。」

ミチルは明日一緒に探そうという事にして電話を切った。

「（もう夜も遅いし雨も降っているしそれに……。）」
おそらく頼めば千尋は心よく手を貸してくれるだろうとミチルは思った。

しかしミチルは千尋に探すのを手伝ってもらうのは申し訳ないと思つたのである。

そしてまたミチルには一人でも絶対に見つけてやるという強い意思があつた。

ミチルは駅の方へと来た道をストラップを探して歩いて行つた。

道は外灯はあるが夜の0時に人はほとんど通らない。通行人が拾うとは考えにくい。

来た道に無いとすればもう駅しかない。ミチルは思つた。

雨も小雨から大粒の雨となり既にスニーカーも服もギターケースもかなり濡れていた。

しかしミチルにとつてはあのストラップの方が断然大切だつた。

「（もし無かつたらどうしよう。）」ミチルは思つた。

そして何かミチルの持つている全てが自分のもとから去って行く様な気がした。

駅に着くとミチルは驚いた。

千尋がいたのである。

駅の階段の所でストラップを探しているようだつた。

ミチルは走つて千尋のもとに駆け寄つた。

「千尋、なんでここにいるんだよ。」傘をたたみながらミチルが訊いた。

閉じた傘の先から床に小さな水溜りができた。

「なんでってあんなに大切なストラップだって言ってたじゃん。」
千尋は普通に答えた。

「それはそうだけど・・・」ミチルは言った。

「ミチルこそ明日探すんじゃないの？」千尋も訊いた。

「それも・・・そうなんだけど・・・」

ミチルは雨で濡れてぐしょぐしょになっている千尋のブーツに気付いた。

服に泥もたくさん跳ねている。

また走って来たのか？。ミチルは思った。

「千尋ありがと。でもあとオレ探すから。せつかく買ったブーツがほら・・・。」

「いいよ。そんなの洗えばいい。」

「千尋・・・でも。」

「ほら探そ！ストラップ」

「・・・」

「・・・」

大粒の雨の音だけが響いていた。

ミチルは千尋に申し訳ないと思った。

そしてまた自分なんかのためにどうしてそこまでして一生懸命に探してくれるのかミチルには理解ができなかった。

ミチルはしばらく黙っていたが今まで自分の中で思っていた事を千尋に言った。

「千尋・・・なんでそこまでしてくれんだよ・・・。」

「え？」

「オレなんかのためにさ・・・。」

「オレさ・・・なんで千尋がそこまでしてくれるのか意味がわかんねーよ!。」

「前言ったろ・・・。オレはホントに人を好きになったことが無いって。そして誰も信じてないって。オレはそういうつまねー人間だよ?。なのになんでそこまでしてくれんだよ!。」

降ってくる大粒の雨が地面にぶつかる音にも負けなくらいの声でミチルは言った。

「・・・」

千尋は黙っていた。そして千尋が口を開いた。

「そういうの・・・、ヤバって言うんだぜベイビー・・・」ミチルを見つめ千尋が静かに言った。

ミチルは自分の唇を噛んだ。

「・・・教えてくれないか・・・千尋・・・」ミチルも静かに言った。

強い雨の音だけが響いた。

しばらくして千尋が静かに口を開いた。そしてそれはミチルを見つめ今まで見たことがないくらい真剣な表情であった。

「・・・あたしは・・・前ミチルの話を聞いてもそんなことは一つも思わなかったよ。だってあなたは冷たい人でも心が無い人でもないもの。」

「現に今日も・・・あたしのことを思っただけで明日探そうって言ったんでしょ。せっかく買ったブーツが濡れるかと思っただけで。あたしはそう思ってたわ。」

「あなたは・・・確かにホントに人を好きになったことは・・・まだ・・・無いのかもしれない・・・でも一つ確実に言えることがあるわ。」

「それはあなたが『何かを探してる人』だってことよ。」

「あたしは・・・あなたの話を聞いてそれを強く思ったの。」

そして少し間を置いて千尋は言った。

「・・・あたしも・・・探してるから・・・」

「・・・」ミチルは黙っていた。

“あたしも探しているから”という千尋の言葉はミチルの心の中に強く共鳴して響いていた。暗く冷たい凍土の高い崖の先端でひざを抱え、崖のずっと下に大きく広がる深い海をジッと見つめているミチルを千尋が自分の小さな手漕ぎボートで迎えに来てくれているようなイメージをミチルはその時感じていた。

そして千尋は高い崖の上のミチルに手を差し伸べている。あとはミ

チルがその崖から海に浮かぶ千尋のボートに飛び降りるだけであつた。

もし千尋とこの大きく深い海を旅すればどんなに楽しいだろう。もしかすると自分は苦勞も苦勞とは感じないのかもしれない。ミチルはそう思った。

そしてミチルは凍土の崖から立ち上がった。そして崖の遙か下の水面で待つてくれている千尋を見つめ少し微笑んだ。あと1歩足を前に出せば千尋の待つボートに飛び込める。ミチルは覚悟を決めた。しかし頭にある事がよぎつた。自分などと旅をしても千尋は幸せになるのだろうか。自分と千尋の心の色はあまりに違いすぎる。黒い心と白い心。絵の具を溶いた黒い水と白い水のように2つが混ざれば自分にも千尋の白い色が混ざり黒い色もいくらか薄くすることができるかもしれない。しかしそれは逆に千尋の白い色を自分のせいで汚してしまうのではないだろうか。ミチルはそう思うとあと1歩が踏み出せないでいたのであつた。

大粒の雨の音だけが二人の無言の時間を埋めていた。

千尋は悲しい目をした。

「・・・ミチルには・・・私は必要・・・ないのかな・・・。」千尋が小さな声で言つた。

千尋はミチルを見つめた。

「・・・。」

やはりミチルは黙つたままであつた。

千尋は唇を一字に結んだ。顎の先端から涙が流れ落ちた。そして千尋は下を向いた。

そして千尋はゆっくりと回れ右して自宅の方へ歩き始めた。

このまま千尋を行かせてしまうという事が、二人の関係の終わりを示すという事はミチルにも分かつていた。しかしミチルはやはり黙つたままであつた。

無言の千尋がゆつくりとミチルから遠くなっていく。

千尋のブーツの音がどんどん離れていく。

そして千尋の姿が小さくなっていく。

千尋という存在がミチルの中から消えていく……。ミチルにはそう見えた。

ミチルは自分の心の中で自分自身に弁明をしていた。

だって……。オレと千尋は違いすぎるんだ……。

自分は千尋にはふさわしくない……

これでよかったんだ……。結果……。

ミチルの脳裏には千尋と出会った日から今のこの瞬間までがゆつくりと流れていた。

そして千尋の姿が見えなくなると同時にミチルの中からも千尋の映像はTVのコンセントを抜いた様にプツンと消えた……。

ミチルはその瞬間から周りの一切が無音に感じた。

何も聞こえない……。

聞こえてこない……。

終わったんだ……。

……。全部……。

ミチルはそう感じた。。

そしてミチルは両膝をガタンと地面に落とした。

……。オレが悪いのに……。

……。ごめん……。

ミチルは虚ろな目をしていた。

目の焦点なんて合ってはいなかった。

ただぼんやりと1点を見つめていた。

ミチルは意識が朦朧としていた。

降りしきる大粒の雨の中、ただ駅の外灯だけが冷たく光って見えていた。

少ししてミチルはポツリと言った。

「・・・イヤだ・・・。」

そしてミチルは自分にある感情が沸き起こってきているのを感じた。それはとても明確で、ミチルを突き動かす直線的な熱の様なものだった。

自分の心臓が創り出している一音一音がはっきりと聞こえた。

自分の感情の最前列から最後列までの全てが強く叫んでいるのが聞こえた。

それはあの日初めてライブを観に行った時に感じた情熱にも似た感情であった。

イヤだ！。

絶対に！

千尋がいらないなんて！。

ミチルはもう走っていた。

論理や思考などそんな崇高なものでは無かった。ミチルを動かしたのはたった一つの単純な感情ただそれだけであった。

ミチルは全速力で走って千尋に追いついた。

「千尋！！。」

そして後ろから千尋の手首を掴んだ。

大粒の雨に打たれ、もう二人ともズブ濡れ状態であった。

後ろを向いたままの千尋にミチルは走って乱れた呼吸のまま言った。

「・・・手伝ってくれないか・・・。。。。。。探すの。。。。。。」

「。。。。。。。」

千尋は何も言わなかった。

ミチルは続けた。

「・・・一緒に・・・。」

すると千尋はその立ち止ったうしろ向きの姿のまま、ゆっくりとうなずいた。

ミチルは後ろから千尋を抱きしめた。

「ごめん……。千尋……。」

ミチルの目からは涙が流れていた。

千尋は声を出して泣いていた。

そして千尋は泣きながら、小さく言葉をつまらせながら言った。

「……。涙……は……。似合わないぜ……。ベイビー……。」

「……。いいんだ……。もう……。もう……。」

ミチルも泣きながら言った。

そして千尋を強く抱きしめた。

雨は少し小降りになっていた。

そしてそれはミチルの心を潤し、二人を優しく包んでくれているかのようにも見えた。

しばらくして雨はやみ、二人は一緒に駅を探した。

ロータリーの周りや縁石の隙間から駅の回りまで。

ゴミ箱の中から側溝の中や植え込みの中まで探した。

歩いたところとそれ以外も考え付く所は全て探した。

衣服は既に雨で濡れていたがさらに泥でも汚れた。

しかし二人は気にならなかった。

時刻は既に午前4時になっていたが一向にストラップは見つからなかった。

「これだけ探して見つからなかったら仕方ない。あきらめもつくよ。ありがとう千尋。」ミチルが言った。

「まだ探してみよ。どこか探してない場所にあるかもしれないし。」

「いや。もう大丈夫だと思う……。ストラップ無くて。」ミチルがつぶやいた。

「でも……。」千尋が言った。

「ミチル。」

千尋はそう言つて手に握ったものをミチルに手渡した。

「これ、あげる!。」

それは千尋のダースベイダーのキーホルダーだった。

「いやいやこれは貰えないよ千尋。だってこれは千尋の『奇跡のベイダー』だろ。そんな大切なもの貰えないよ。」

ミチルは千尋に返した。

「ミチルに使ってほしいの。」

「いや貰えないよ。」

「・・・じゃあ・・・わかった。」千尋が言った。

バキッ！！

「千尋！」

千尋は手に力を込めて奇跡のベイダーを2つに割った。

ミチルは驚いた。

割ったと言っても構造上実際割れたのは『頭部』と『その下半分』の2つになったのが。

「はいミチル。半分あげるよ・・・ベイダーの奇跡。」そう言って千尋は大きい方をミチルに渡した。

「・・・バカだよ・・・ホント・・・千尋ってさ・・・」

ミチルは受け取ったベイダーを握った手で千尋の頭を抱き寄せ涙が出そうなのを隠した。

「おーこんな朝早くから？君たち。でもまだ始発無いよ。」

それは駅員だった。以前一度ミチルに声をかけてきた、千尋がミチルのことを尋ねたあの駅員だった。

「あ。おはようございます！。駅員さん。」千尋が礼儀正しく答えた。

「あつ、どうもです。」ミチルは気まずい感じで答えた。

「あ、もしかしてグリーンデイのギターピック探してる？白いの。」駅員が言った。

「そうです！！」二人が驚いて言った。

「昨日深夜駅でキーホルダーにしてあるピックを拾ってね。裏に日付けとか丁寧に彫ってあったからこれライブでGETしたピックじゃないかと思ったんだ。おじさんもこう見えて昔はロックやってたんでね。でグリーンデイのピックだったからもしかして君のじゃないかな」

いかと思つてたんだよ。」

「君、駅でよくグリーンデいの曲も弾いてただろ？。おじさんもKISSってバンドのコピーしてたんだよ。まあ昔の話だけど。」

「それに弾き語りで洋楽やってる子はあるまいしね。ここら辺じゃ。」

そう言つて駅員室からストラップを持つてきてくれた。

ストラップを見るとチェーンの金具が緩んでいた。はずれた原因はこれのようだった。

それから駅員とミチルは少しの話をした。

レッドツェッペリンとディープパープルはどちらが好きとか自分はKISSのベーシストであるジーン・シモンズと同じ誕生日だとか。

千尋はまったく話がわからなかったが楽しそうに話すミチルの顔をずっと見ていた。

「ホント、ありがとうございました！」ミチルと千尋は丁寧にお礼を言つて駅員と別れた。

「まさか駅員さんが持つてたとはね。」歩きながらミチルが言った。
「ホントなんで考えつかなかったんだろ。」千尋が笑いながら言った。

「でも見つかった時、正直ホントビックリしたよ。もう見つからないだろうなと思っててもいたからさ。」ミチルは言った。

「もしかしたらベイダーの奇跡かもよ。」千尋が言った。

「うん。そうかもね。」ミチルは素直に言った。

その時ミチルは思った。もし千尋が最初に駅員と知り合いにならなければ今日あの駅員にギターピックの件で自分は声を掛けられただらうか。

もしそうならあのピックは一生見つからないままだったかもしれないと。

そして千尋という人間をやっぱ不思議な子だと思った。

「でもよかったね。ミチル。」千尋が言った。

「うん。ありがとう。」

その言葉は千尋に対するミチルの素直な感謝の言葉であった。

「あゝ、ちよつと待ってて。」

ミチルはそう言うのと駅の3分間証明写真機の方に走って行ってその横で何かしていた。

戻ってくるとミチルは千尋に言った。

「これ千尋が半分持っててくんないかな。」

見るとさっきのギターピックだった。2つに切断されている。

ミチルは証明写真機に備え付けのハサミでピックを二つに切ってきたのであった。

千尋は驚いた。

「穴の位置の関係でちよつと形、変だけどさ（汗）。」ミチルは付け加えた。

「どうして切っちゃったの！？だってそれミチルの大切なピックでしょ！？」千尋は言った。

「だから持っててほしいんだ。千尋にも。」ミチルは言った。

千尋は微笑んでゆっくりとうなずいた。

「でも無くしちゃうかもよ。ミチルみたいに。」千尋が冗談気味に言った。

「そしたら・・・新しく取りに行こうよ。ライブ。一緒にさっ。」

ミチルは言った。

「うん。」千尋は笑顔で言った。

そして千尋は続けて言った。

「このチヒロめが喜んでお供いたしましょう！。ミチル姫。」

いつものナイスガイ口調だった。

「なんでオレが姫なんだよ。毎回！。」ミチルがいつものように言った。

「いいじゃん。」千尋もいつものように答えた。

まだ完全に夜は明けていなかったが晴れそうな朝だった。

それからミチルの携帯には白いイビツな三角のギターピックの片割

れと首から下だけのダースベイダーが、千尋の携帯には白いイビツな三角形のギターピックのもう片方と頭だけのダースベイダーがストラップとして付いた。

「オソロイになっちゃったね。ミチルちゃん。」千尋が言った。

「まあ・・・ね。」ミチルはそう言って少し笑った。

■第3章 キャッチボール

金曜日、ミチルは大学の講義を受けていた。

マクロ経済学。ミチルにはまったく興味の無い科目ではあるが卒業単位の構成には必ず必要であつた。

またそれはミチルに限つたことではなく他の生徒も少々出席していると云つた様子であつた。1000人は軽く入る講義堂に散らばつた疎らな若者達。ミチルもその中にいた。

授業中ミチルは千尋の事を考えていた。

千尋は昨日の木曜日の朝から実家に帰っている。千尋の祖母が木曜の朝に亡くなり千尋もすぐに実家の静岡に帰つたのである。

癌で入院中であり長くはないだろうと医者に言われていたのだが木曜の朝急変して亡くなつたのだつた。

ミチルは昨日の木曜の朝の事を思い出していた。

朝九時前、ミチルが朝一の大学の講義に向かつている時、携帯が鳴つた。

千尋からだつた。ミチルはいつも通りに携帯に出た。

「ミチル・・・」

様子が変だつた。千尋は泣いていた。いつもとはまったく違つ千尋だつた。

「どうした！？何があつたの！？」

「・・・おばあちゃんが・・・」

涙が言葉を上回つてしつかりしゃべれてない状態だつた。

「（もしかして癌と言つていたおばあちゃんが亡くなつたのだろつか。千尋の様子からすると。）」「ミチルは頭の中で推測した。

「千尋。今どこ？」「ミチルは言つた。

それから30秒くらい千尋の泣くのを抑える息使いだけが聞こえた。そして千尋が答えた。

「ごめん・・・ミチル。」

「いや。全然いいよ。」ミチルはゆっくり言った。

「さっきね、母さんから電話があつてね、おばあちゃんが・・・亡く
なつたつて・・・。」

泣くのを押さえながら話しているのが伝わってきた。

ミチルは目を閉じた。

「そっか・・・。」ミチルはそう言った。

そう言ったがそれしか言えなかった。

「千尋今からそっち行くよ。」ミチルが言った。

「ありがとう・・・ミチル。」

「でも・・・すぐ用意して実家帰らないといけないから。」

「ありがとうね・・・ミチル。」

そう言つて二人は電話を切った。

ミチルは何も言つてやれなかった自分が悔しかった。しかし今の自分
に出来るのは早く実家のおばあちゃんの元に千尋を帰すことだとも
思った。その時ミチルは何も助けにならない自分の無力さを感じ
ていた。

「（今日は葬儀つて言つてたな。）」講義を受けながらミチルは昨
日の深夜千尋からきていたメールを見返した。

昨日の木曜日がお通夜で今日の金曜が葬儀となり土日は実家に滞在
してその日曜の夕方の新幹線でこっちに帰つてくるとのことだった。
ミチルは当たり障りのないメールを返したがやはり実際なんと声を
掛ければいいのか分からなかった。

そしてミチルは今、金曜朝一の講義が終わり次は午後からの講義で
13時まで空き時間となつた。現在時刻は10時30分であつた。
2時間以上時間がある。

ミチルは大学の溜まり場へ向かつた。ミチルの大学は国立にしては
規模も比較的小さくそこには経済学部しかないと人数も他大学よ

りはるかに少ない。

だから大学へ行けばほとんどみんな一度は見たことがある顔ばかりである。

そしてみんなそれぞれのグループは大体いつも同じ場所にタム口していた。

だから携帯などで連絡を取らなくてもその場所に行けば大体会える。もちろん大学に来ていればの話であるが。ミチルや友達はB棟2階の談話室横にあるベンチ付近によく集まっていた。

しかしその日はまだ誰もいなかった。

「（みんな単位大丈夫なのか。）」ミチルは思った。

朝一の授業はテスト前にならないとみんななかなか出てこない。

そして大学生は夜更かしが当たり前である。飲んでるわけでもないのに午前3時や4時に寝るなど当たり前である。

ミチルは隣の購買部に行つて音楽雑誌を立ち読みした。音楽雑誌は内容も面白いが載っている写真がアートっぽくて時間を潰すにはもつてこいだとミチルは思っていた。

「ミチル、コーヒー。」

音楽雑誌の横から声がした。

それは涼子であった。ミチルの元彼女である。ミチルが唯一大学内で付き合つた子であった。

涼子は支払い前のブラックの缶コーヒー2本をミチルに差し出した。「ん？」ミチルは言った。

「賭けてたでしょ。昔。レディオヘッドが一年以内に解散するかどうか。」涼子は静かな口調でそう言った。

レディオヘッドとはイギリスの有名なバンドでありミチルがその存在を教えて涼子は好きになった。最初はボーカルのトム・ヨークがカッコいいと言っていた涼子もいつの間にかレディオヘッドのファンになった。レディオヘッドの活動停止説が浮上した時ミチルと涼子は付き合っていてミチルは『解散する』に賭け涼子は『解散しない』に賭けていたのだった。

「あーね。」ミチルはやつと思ひ出したといった表情で渋々その2本の缶コーヒーを受け取った。

「熱っ！」

ミチルは缶を落としそうになった。

「購買部のは激熱だからね。端っこ持たないと。」涼子は今更といった表情で言った。

「でも何で2本？」ミチルは訊いた。

「あつちで飲まない？」涼子は外を指差して言った。

「まあ……。いいけど。」

涼子はそう言つて先に購買部を出て行つた。

ミチルはあまり乗り気ではなかったがとりあえず会計を済ませた。そして涼子の座っている談話室横のベンチに自分も腰掛けた。そして昔涼子と付き合っていた時もこうやって涼子の隣に座っていたことを少し思ひ出した。

「はい。コーヒー。」ミチルはそつけなく言った。

「ありがと。」涼子もそつけなく言った。

「ミチルもブラックでよかった？」涼子がミチルの方を見ながら言った。

「うん。」

「変わつてないよね。」涼子がポツリと言った。

「ああ、まあね。」

涼子もブラック派であつたがそれ以上にミチルはブラックコーヒーを好んで飲んでいた。

というよりミチルにとってブラックコーヒーは水と同じ感覚だった。もちろんそれは今に始まつたことではなくミチルの実家がそうだった影響である。

水を飲むのに砂糖は入れないのと同じでコーヒーに砂糖やミルクが入っているものはそれはコーヒーでは無くジュースの部類に入るとミチルは思っていたしインスタントコーヒーはいまいち好きになれなくて自分からは飲まなかった。

アパートには安くてもレギュラーコーヒーの豆を常に置いておりドリップして一日に１リットル近く飲むことも普通であった。体質もあるのであるうがミチルには胃が悪くなるとか眠れなくなるという人の気持ちがかく分らなかった。

もちろん砂糖入りの缶コーヒーを買っても普通に飲むがそれはジュースの類として飲んでいた。またコーヒーは水と同じ感覚だったのでお金を出して買うというのはもったいないと思っていたし飲みたければ家で作ればいいと思っていた。

だからミチルは大学内では殆んどコーヒーを買うことが無かったし、人がアパートに来た時は砂糖を入れて出していたためミチルがブラックコーヒーが好きだと知っている者は殆んどいなかった。

ミチルと涼子とは大学２年の時付き合っていた。お互い小さな大学内で顔は見たことがあったが話したことは無く、ミチルのグループの一人が涼子のグループの一人とバイトで知り合いになり交流ができたのがキツカケだった。

涼子は美人で学内でも人気があった。確かにあまり笑ったりはしないし外見や話し方は一見冷たい様に見える。

しかし他人のいろんな所に気が回る優しい性格であったので男からも女からも人気があった。

「めずらしくない？。声掛けてくるとか。」ミチルが言った。

「そう？あたしはみんなに優しいからね。」涼子が返した。

ミチルは昔の事を少し思い出した。涼子はそれまでミチルが付き合った女の子達とは少し違っていた。よく気が付く性格なのは確かであるがそれだけでなくたまにミチルの心を見通した様な言葉をサラリという時があった。

それはわかって言っているのか特に意図が無く言っているのかミチルには分からなかったが涼子の鋭い洞察力の様なものに何か一目置いている自分がいたのは確かであった。

「そう言えばさ、声はまだなんですよ。」涼子が言った。

涼子もミチルの声が出なくなっただのを知っている。

「うん。」ミチルは静かに答えた。

「じゃあ何なのかな。」涼子が上を見上げながら言った。

「何が？」ミチルが訊いた。

涼子が少し笑った。

「ねえ、最近の噂知ってる？」

「噂？」

「そう。」

「何の？」

涼子がミチルを見て言った。

「あなたのよ。」

「オレ？」ミチルは驚いた。

「そう。最近あなたが変わったって。」

「みんながそう言ってるわ。ミチルの友達もあたしの友達も。」

「一体何があったの？」

涼子がいつになく直球で言っているようにミチルは感じた。

涼子はタイプに分けるとまず城の外堀を埋めてから攻めるタイプでいきなり核心なんて絶対に突いてこないタイプだったからだ。

「別に特には。」ミチルは言った。

「はあ。」

涼子は小さくため息をついた。

「そこら辺は変わってないんだよねえ。」涼子が呆れた感じで言った。

「じゃあ言うわ。ミチルあの女の子と付き合ってたの？」

それを聞いてミチルは涼子がなんで知っているんだろうというのとやっぱり何かあると思ったという気持ちが混ざった顔をした。

「2、3日前の夜ね、駅を通ったらミチルという女の子を見たわ。」

「あの子が新しい彼女？」

「・・・まあ。」ミチルは言った。

別に隠してるわけでもない。ミチルは思った。

「カワイイ子だね。でも何か今までの子達とは雰囲気違う感じ。」

「そういう言い方・・・やめてくれよ。」ミチルは涼子の目を見て静かに言った。

そして少しの沈黙が流れた。

「ごめんなさい・・・。なんか二人ともすごく楽しそうで。あんなミチルは初めて見たから。」涼子も静かに言った。

「そうかな。」ミチルは少し気不味く答えた。

「そう感じたわ。あたしは。」

「あたしと別れた後ミチルが付き合った子、何人か見たことがあるわ。でもその時もミチルはあたしと付き合ってる時と同じような目をしていたわ。」

「でも昨日見たあの子と話してるミチルの目はあたしの時とは全く違う。そう思ったわ。」

涼子はミチルが大学に入って付き合った女の子の中では一番長く続いたが唯一向こうから別れを告げられた相手であった。ある日突然一方的に。

涼子は今更なぜそんな話をするのだろう。ミチルはそう思った。

「あの子は何が違うの？」涼子が言った。

「違うつて別にそんな変わった子じゃないと思うけど。」

「じゃああたしと同じってこと!？」

「いや、そういう訳じゃないけどさ・・・。」

涼子が珍しく突っかかってくるのにミチルは驚いた。

「じゃあ何が違うの。」

「違いって言われても・・・。」

ミチルは答えに困った。

そして少し沈黙の時間が流れた。

「でも違っんだよね。きつと・・・。」涼子がポツリと言った。

そして涼子は語りはじめた。

ミチルと付き合っていた大学2年の時のことを。

「あたしね、ミチルと付き合ってるあの時感じてたの。あなたは心の中に何か重たい塊みたいなのを背負ってるんじゃないかって。」

「え？」

ミチルはドキリとした。洞察力の鋭い涼子にはミチルの心の闇は見抜かれていたのであった。

たまに感じていたミチルの心を見通したような涼子の言葉は偶然ではなかったのである。

涼子は話を続けた。

「あなたと付き合って日を重ねる度、それは確かにある、あたしはそう思ったわ。」

「そしてそれが一体何なのかとても気になったわ。あなたと居る時も居ない時も。ずっと・・・」

「いつかあたしがその重い塊をあなたから取り除いてあげられらつてそう思ってたわ。」

「でも・・・ダメだった・・・」

「どうやってもあたしにはミチルのそれを取り除いてあげることが出来なかった。そしてその時あたしは何か自分の無力さみたいのをすごく感じたわ。そしてそれがとても苦しくてそれにあたしは耐えられなかったわ・・・このままじゃあたしっていう自分自身もダメになる気がしたの。だからあたしあなたに別れようって言ったの。」

「そして一方で・・・あなたの背負ってるそれには決して触れちゃいけないような気もして・・・」

「もしかしたらあたしが怖くて触れられなかっただけなのかもしれないって・・・今は思うけど・・・」

涼子はそう言うのと黙った。

そしてしばらくしてまた口を開いた。

「あのとき、あたしがもつと頑張ってたさ、ミチルのその重い塊をキヤッチボールみたいに少しでも預かってあげることが出来てたらさ、あたし達・・・今頃こんなじゃなかったかもしれないのね・・・」
そう言うのと涼子はすぐに下を向いた。肩まである髪が涼子の顔をそっと隠した。

そしてそこから涙がポタポタと数滴床に落ちた。

それはミチルが見た初めての涼子の涙であった。

「涼子・・・」

「悪いのは・・・オレだから・・・」

「まったく・・・そこら辺はホント変わってないよね。」小さな声で涼子が言った。

それから二人とも少し黙ったままだった。

そして涼子が口を開いた。

「でも今のミチル、いい顔になったって思うよ。」

涼子はミチルに目を合わせなかったが明るい声を出してそう言った。また少し間を置いて涼子が言った。

「じゃあゝそろそろ行くねっ！。あなたのアンパンマンによろしくね！」そう言って涼子は笑顔をつくった。そしてゆっくりとベンチを立った。

「アンパンマン？」ミチルは言った。

「そういう人なんでしょ？。おそらくけど・・・。」涼子はやさしく言った。

「・・・うん・・・そうかもしれない。」ミチルは言った。

そしてその時涼子は少し遠い目をした。

そしてまた笑顔をつくった。

「あ、そうだ。」

別れ際に涼子はそう言っているとベンチのミチルに何かをそつと投げてよこした。

「？」

ミチルはそれを左手でキャッチした。

それは一粒のカフェオレの飴だった。

「女の子はブラックよりも甘いのが好きだよ。」

そう涼子は言って、少し微笑んだ。そして歩いて行った。

涼子のそういう微笑を見たのもミチルは初めてだった。

「（ありがとう。）」「ミチルは心の中で涼子に言った。

■第4章 二人の月

土曜日の夜8時。ミチルはアパートのパイプベッドにあお向けになつて考えていた。

「（今千尋は何をしているのだろう。無事葬儀は済んだつてメールは来たけど。）」

金曜の深夜千尋からメールが来ていた。返信はするがミチルはこちらからメールするのは控えていた。葬儀時はいろいろと忙しいのは分かつていたからだ。

しかし一番の理由はなんと声をかけるのが良いのか分からなかったからであつた。

千尋が実家に帰つてからは毎日深夜にメールが来ていたので今日もそうだろうとミチルは思った。

「（千尋は今どんな気分なのだろう。）」

「（あまり落ち込んでなければいいけど。）」

「（しかし千尋はおじいちゃんおばあちゃん子と言っていたし落ち込みようはかなりだろうな。）」そんな事を考えながらミチルはベッドから起き上がった。

そしてギターを持って駅へと向かった。何かしていないと落ち着かない気分であつた。

月の明かりで外は意外に明るく感じた。ミチルは駅へと軽く走つて行つた。何かモヤモヤとした気分を体を動かしてでも解消できればと思つたのであつた。

ミチルは駅に着くといつも千尋と話をしているロータリーの縁石に腰掛けた。

すると何か少し落ち着いた気分がした。そして持ってきたアコースティックギターを弾き始めた。ミチルは曲の間奏部分を繰り返し弾きながら自分の心を落ち着かせた。

そしていろいろと考えた。千尋が実家に帰つてからのことを。

何をしていても千尋の事を考えている自分がいた。

それは今回千尋に悲しさが降りかかったからであると最初は思っていたが。

ギターを弾き始めてあっという間に一時間半が経った。

ミチルは演奏を止めた。そしてふいに夜空を見上げた。その日は満月だった。白く無機質に光って見える。ミチルはそれを見て自分の中に何か少し特別な気分を感じた。

ミチルはおもむろにポケットから携帯を取り出しその満月を携帯のカメラで撮った。

そしてメールを打ちはじめ撮った満月の画像を添付し千尋に送信した。

すると意外にも千尋からすぐに返信が来た。

『そう言えば今夜はブルームーンなんだよ。いろいろあつて忘れてたけどさ。』

そう書いてあった。

『ブルームーン？月が青いつてこと？』ミチルは返信した。

5、6分くらいして千尋から返信が来た。

『本当はね。でも最近では1ヶ月の間に2回目出た満月をブルームーンっていうんだって。』

千尋がやたらと月に詳しいのにミチルは驚いた。

『そんなことつてあるんだね。満月は1ヶ月に1回だけかと思ってたよ。』ミチルは返信した。

『3、4年に一回あるか無いかの珍しい事なんだって。』

そう千尋から返信が返ってきた。

『そうなんだ。全然知らなかったよ。』ミチルはまた返信を打った。

「他に言い伝えとかもあるんですぞダンナア。」

ミチルの耳の後ろでそうささやく声がした。

携帯に集中していたミチルはビクツと体も一緒に驚いた。

しかしそれは聞き覚えのある声であつた。

「千尋！？」ミチルは振り返りながら言った。

千尋だつた。

「後ろには気をつけなくて言つたはずだぜベイビー。」

千尋はいつものナイスガイ口調でそう言うと言つた。

「びつくりするだろ！？てかいつから後ろにいたの！？」

「今さつき。」

千尋は明日の日曜夜に帰ってくるはずである。今日はまだ土曜の夜なのになぜここに居るのかとミチルは思った。

「どうして！？」ミチルは言った。

「今日帰ってきたの。16時半発の新幹線乗ってね。で今着いたんだ。いやあ5時間は長かつた。しかも隣の席のおばさんが話好きでさあ。あ、メールは駅に着く少し前からだけだね。こつちに歩いてきながらメール打ってたんだよ。びつくりした？」千尋が澄ました顔で言った。

「びつくりするに決まってるだろ！大体千尋帰ってくるのって明日の夜のはずだろ！？」ミチルは言った。

「忠犬ミチ公が駅で待ってるんじゃないやと思つてさ。」千尋はそう言いながらミチルの横に座つた。

「え！？そんだけの理由で帰ってきたの！？」

「まあね。さみしかつたかあ？ミチ公。」

千尋はそう言つてミチルの頭を撫でながら頬擦りするマネをした。

「ちよつと！人見てるし！てかオレいなくなつたらどうすんだよ。」

ミチルは千尋の手を頭から取りながら言った。

「まあ確かに新幹線乗る時は分かんなかったけど。でも居るって分かつたよ。ミチルの満月の写メ見て。」

「は？月でどうして？」

月しか写っていない写メを送つたのになぜ自分が駅に居ると分かつたのかミチルは不思議だつた。

「だって写メの月。いつも見てる月だつたからさ。」千尋ニヤツと

しながら言った。

ミチルはますます分からなかった。

「え？いつも見てる月って……どういうこと？」ミチルは全く分からないう顔で訊いた。

それを聞いて千尋はさらにクスクスと笑った。

「これを見たまえワトソン君。」

千尋がシャーロックホームズ口調で言いながら自分の携帯の画像を見せた。

「あ！」ミチルは驚いた。

そこには自分が今日撮った満月の画像とソツクリな画像があったのだ。

「これはあたしの待ち受け画面。あたしが撮った今月の1回目の満月だよ。だからファーストムーンだね。まあちよつと雲かかってるけど。」

千尋は続けた。

「ほら見てミチル。この画面の右下。ミチルの画像と同じ木の枝が写ってるでしょ。」

見ると確かに同じ枝が写っていた。それはクネクネと曲がっていて他の枝とは明らかに違う特徴的な枝だった。

「まあミチルがもしこの場所から撮ってくれなかったら分かんなかったかもしれないけどね。」笑いながら千尋が言った。

「なんだ驚いて損したよ。」ミチルがやられたという顔で言った。

「損どころか超得したでしょ。チヒロ・ホームズの神がかり的な謎解きが目撃できたんだからさ！」そう言って千尋は笑った。

しかしミチルは思った。いつもこの駅のロータリーの縁石に腰掛けて話をしたり歩く人などの何気ない景色を見たりしてはいたがそれは自分一人ではない。千尋も自分と同じ景色と一緒に見ているのだ。ミチルはそれに改めて気付かされた。

「ミチル。」

少しして千尋がふいに真面目な顔で言った。

「おばあちゃんの件・・・心配かけたよね。」

「いや全然。てか何もできなかったし。」ミチルが言った。

「ううん。あたしミチルがいてくれると思ったらさ、なんかすごく心強くてさ・・・。ミチル、ホントに・・・ありがとう。」

千尋は少し涙ぐんでいるように見えた。おばあちゃんの事を思い出したのだろうか。ミチルは思った。

千尋は今日元気に帰って来はしたが実家に帰った日はお通夜で次の日は葬儀であった。千尋の性格から考えて、もしかしたらほとんど寝ていないのではないだろうか。あれだけ好きだったおばあちゃんが亡くなったのだから。ミチルはそう思った。そして千尋の手を強く握った。千尋もその手を強く握り返した。そしてしばらくの時間が過ぎた。

「今日ね・・・」千尋がポツリと言った。

「手紙もらったんだ。おばあちゃんからあたし宛の。亡くなるちょっと前におばあちゃんがお母さんに渡してたんだって。もう長いって自分でも分かってたみたい。」

「そうなの？」

「うん。」

「それ読んでさ・・・。今日こっちに帰ってこようって思ったんだ。」千尋は月を見上げながら言った。

そしてもういつもの千尋の明るい感じだった。

「そうだったんだ。」ミチルは言った。

そしてミチルは少し安心を感じた。

しかし手紙を読んですぐ帰って来るってくらいの内容とはどんなことが書いてあったんだろうとミチルは思った。

「何て・・・書いてあったの？」ミチルは訊いてみた。

「それはね・・・」

「いつか教えるね。」千尋はそう言ってニツと笑った。

「は？？そこまで言っというて？」

「いいじゃん。ほら満月！1000年に一度のブルームーンだよ。」
千尋が指差した。

「3、4年って言ってたろ。さっき。」ミチルが呆れた口調で言った。

「まあまあ、ミチル君、こうやって一緒にブルームーン見れたんだからさっ。」

そう言っただけで千尋はミチルの左腕に自分の右手を回した。

そして千尋が言った。

「だだいま。ミチル。」

ミチルは左に座っている千尋をチラリと見た。

そして言った。

「うん……。お帰り。」

しばらく二人は月を眺めた。

月は青くは無かったがミチルには銀色に強く輝いて見えた。ミチルはそれを見て綺麗だと感じた。

「あのさ千尋……」ミチルがポツリと口を開いた。

「……」

返事がない隣を見ると千尋は眠っていた。

「（そうだよな。）」「ミチルは心の中で言った。

ここ何日かの千尋の事を考えるとミチルは素直にそう思った。精神的にも肉体的にもかなり疲れているはずなのに。

その時ミチルは昨日涼子が言った『あなたのアンパンマン』という言葉进行い出した。

そしてミチルに寄り添いながら疲れて眠っている千尋を見つめた。

「（働き過ぎだよ。このヒーローは。）」「ミチルは心の中でそう言っただけで微笑んだ。

そしてまた銀色のブルームーンを見上げた。

■第5章 フライングV

その日ミチルはレポートの調べもので大学の図書館にいた。

「あ、ミチルさん。こんにちは。」

そう言いながら歩いて来たのは軽音サークルの一つ後輩である熊田ゆう子だった。

みんなには『熊ちゃん』という愛称で呼ばれ親しまれている明るく礼儀正しい後輩である。この熊田ゆう子のは新入生歓迎の学内イベントでミチル達のバンド演奏を観て憧れて軽音サークルに入ってきた。その理由から組んでいるバンドはミチルが組んでいたのと同じくパンク系バンドであった。そして女の子3人で『デスベアー』というスリーピースガールズバンドを組んで熊田はギターとヴォーカルを担当していた。

2ヶ月くらい前、ミチルはこの熊田に自分達のバンドの曲を作ってもらえないかと一度頼まれたことがあった。しかしミチルはそれをゴメンと断っていた。

ミチルは熊田に曲を作ってあげる事が決して嫌な訳では無かった。前バンドで曲を全て作ったのもミチルであったし曲を作るという事自体は好きであった。しかし今年自分の声に異変をきたしてから自分の納得のできる曲が作れる自信が無かったのである。音楽という自分の目標達成への情熱が作曲への原動力となっていたのを自分でも分かっていたのである。もし作曲を引き受けてつまらない曲を熊田にあげる様なことはしたくない。ミチルはそう思っていた。

「やあ。熊ちゃん。頑張ってる？バンド。」ミチルは言った。

「はあ。やってはいるんですが・・オリジナルがまだできてなくて・・。」

いつになく元気の無い声だった。

ミチル達が以前組んでいたバンドでオリジナルをやるうとして動きだしたのは今の熊田と同じ2年の時であるがそれは大学2年の春であつた。熊田は今2年だが季節はもう冬になるうとしている。ミチル達を目標にしている熊田にとって遅れをとっているという事は痛い程に分かつていた。

「・・・オリジナルって難しいです・・・」熊田が下を向いたまま言つた。

確かに素人の作曲とは言つても作曲は一瞬でポロポロと出来上がるものではない。大学のみんなはミチルが作った曲は大学1年の時に書き溜めていたものだと思っている。確かにそれも大きくあるがそれとプラスして高校の時から自分の中でこうなりたいという憧れの想像を常に頭の中で練り上げていた。大学2年時に出来上がった曲達はその何年かの構想の結果なのである。

「確かに簡単じゃないよね・・・」ミチルは自分を思い返しながらかつた。

「そうですね。簡単はずが無いんです。わたしなんか・・・」いつになく熊田のネガティブな発言にミチルは何か気になった。

「どうしたの？何かあつた？」ミチルは訊いた。

熊田は少しためらつたようだったが話し始めた。

「ミチルさん実は・・・」

「今バンドが微妙な時期なんです。なんか他の2人のモチベーションが上がらないっていうか。あたしがオリジナルがまだ作れてないのが悪いんですけど。以前ミチルさんに1曲作ってもらえないかとお願ひしたのは何かバンドに1つ足がかりみたいなものが欲しくて・・・もちろん自分のバンドの曲なのにミチルさんにお願ひするのは筋違いだと思つたんですが・・・なんかこのままじゃ・・・」

そこまで言つて熊田は止めた。その続きはミチルにも分かっていた。『解散』または『自然消滅』

という言葉である。

以前ミチルのバンドが解散したことに気を使ったのだろうとミチルは思った。

「変な話してすみません。あたし頑張つてオリジナル作りますね！」

そう言つて丁寧におじぎをすると熊田は足早に去つて行つた。

ミチルは去つていく熊田の背中を見えなくなるまで見つめていた。解散とはバンドには付き物というが情熱を注いでいた者にとってそれがどういふものであるかミチルは自分の経験から痛い程分かつていた。

ミチルは大きく息を吐いた。

ミチルがふと壁を見ると手作りのポスターが貼つてあつた。『ユニオン』という学内イベントのポスターだった。1週間後に開催と書いてあつた。

「（もう一年経つんだ・・・）」ミチルは心の中で思った。

ユニオンとは大学にある厚生会館というイベントホールで軽音サークル、吹奏楽部、演劇部の3つが合同でパフォーマンスを行うイベントであつた。

それは去年から始まつたもので普通と違う点は3つの部が間髪入れずに順番に連続してパフォーマンスを行うという点であつた。

そのイベントホールは固定の椅子などは無いフラットなフロアであつたため3つのそれぞれの部がそれぞれ壁を1つずつ背にして3方向から順番にパフォーマンスしていく。

例えば演劇がステージで15分のショートストーリーをパフォーマンスしたら間髪入れずに右の壁の吹奏楽部が15分演奏し次は左の壁の軽音サークルがといった流れでそれを連続して回していく。

3つの部が合同でやることで関係者を含めより多くの観客が集まつてもらい3方向から連続して順番にやることで楽器や大道具などのセッティングなどの無駄な待ち時間を省き観に来た観客が飽きずに

できるだけ帰らずに観てくれる事を目的としたイベントであった。本来この時期にイベントをやっていたのは演劇部であったが観客がなかなか集まらず困っているということを聞いて去年ミチルたちが合同でやろうと提案したのだった。もちろん合同でやることには吹奏楽も演劇部も賛成であったが連続して3方向からパフォーマンスするというのは反対であった。みんな中央のステージを使いたい。しかしミチル達の説得で3方向から連続でやる事が実現した。ライブハウスで目的のバンドの時間が終わるとスツとはけていく観客達を知っているミチル達ならではの意見であった。しかしデメリットもあるのは確かだった。演劇部は長いストーリーはやれない事、他の部がパフォーマンスしている時は音を立ててはいけないので吹奏楽も軽音も音の合わせなどは基本無いに等しい。ギターアンプなど事前の音量の調整とある程度勘を頼りに演奏の1曲目をやりながら音量差を合わせていく必要があった。どちらかというとコンサートよりストリートライブに近い。しかし目的が多くの観客に観てもらうという事であったので最終的に全員が賛成したのであった。そしてそれはTVのチャンネルを変える様にリズム良く見れるとして観客の好評を得て今年も同じく開催となったのである。

その日の夜。ミチルはいつものように駅で千尋と逢った。

その日は珍しく二人はロックの話をしていた。

「ところでミチルのやってたバンドってさ何て名前だったの？」千尋が訊いた。

「みんな省略してSSBって呼んでたけど『smile squirrel bites』（スマイル・スクイレル・バイツ）って名前だよ。ミチルが苦笑いしながら答えた。

「へー。どついう意味なの？」

「うーん、簡単に言くと『笑いながらリスがかじる』って感じかな。正確に合ってるか分かんないけど。」

「えーかわいい！」千尋が大きく声をあげた。

「いや。ロゴマーク見たら引くよ。多分。（汗）」

「どして？」千尋が不思議そうに言った。

「黒いリスのシルエットがクルミの代わりにガイコツかじってるから（汗）。笑いながら・・・。」

「なるほど・・・。」千尋も苦笑いした。

しばらく話をした後ミチルは千尋にその日ずっと気になっていた熊田のバンドの話をした。

「そっかあ・・・」千尋が言った。

「うん・・・。バンドが終わるなんてさ、組んだ時は誰も想像なんてしてないんだ。あの時のオレ達もそうだったしさ。あの時はみんなでロックの殿堂入りしようぜとかアホな話して盛り上がったんだけどね。」ミチルが遠くを見ながら言った。

「ロックの殿堂？」

「あ、ゴメン、ロックの殿堂っていうのはロックでもものすごい功績を残した人物の記録を保存する音楽博物館みたいなやつなんだ。で、ロックの殿堂はデビューして25年以上しないと入れないんだ。それはバンドのみんなももちろん知ってたけどさ、それくらい簡単に続くって思ってたんだよね・・・誰も。25年っていったらさ、みんな45歳くらいのオッサンだけだね。でもそう考えると長い間バンドが続いてるアーティストってそれだけでもすごいなあって思うよホント。」

「・・・だから熊ちゃんの話聞いた時なんかさ・・・。」ミチルが言葉を濁した。

「・・・曲、作ってあげたいんだね。ミチル君は。」千尋がニコツとしながら言った。

「うん・・・できればだけど・・・。熊ちゃんのバンドの曲をオレが作るのはちよつと違う気もするけどそれよりも解散なんかしてほしくないんだ・・・。もしもオレの作る曲でバンドが立ち直るキツカケになるのならと思ってさ。」

ミチルは話しを続けた。

「自分のバンドにオリジナル曲があるか無いかって全然モチベーション違うしね。自分達の分身みたいな感じで。」

「でも正直自信なくてさ。前みたいに作れるのかどうか。」ミチルは正直に言った。

「そっかあ・・・。」千尋が少し首を斜めに傾けて言った。

「でもあたし、ミチルなら出来ると思う!。」

「え?」ミチルは千尋の方を見た。

「そういう何かしてあげたいっていう気持ちの時ってさ、なんか出来ちゃうんだよね。結果的に。」千尋が元氣よく言った。

「(千尋らしいな。)」ミチルは思った。

そしてミチルは何か少し気が楽になった様な自分に気付いた。

「そうだね、やってみるよ。自分ができるところまで。」ミチルが言った。

「おっさすがミチル先生!。」

そして千尋が続けて言った。

「あと熊ちゃん達がそれを発表できる場所とかあればねえ。そういうのないの?。」

「うゝん・・・まあ年内ではユニオンって学内イベントはあるけど・・・でもなあ。」

「あつ、それいいかも!。そのイベントで成功できればきっと熊ちゃん達のバンドも変わるんじゃないかな!。」千尋はひらめいたと言わんばかりのポーズで言った。

「え?でも後1週間しかないし無理だよ。」ミチルは言った。

「言ったでしょ。ミチルなら出来るって!。」

この千尋の自信は一体どこからくるのかと少し苦笑いしたミチルではあったがその時ミチルの脳裏に熊田の悲しげな表情も思い出されていた。確かに熊田のバンドには一刻の猶予も無いのはミチルも分かっていた。そしてミチルは真剣な目をした。

「やってみるよ。」

その言葉はミチルのもちろん意思通りであつたが自然に出た言葉だつた。

「ただし歌詞は熊ちゃんに書いてもらうけどね。やっぱ自分のバンドの曲だし。時間の関係もあるけど。」ミチルはそう付け加えた。

「それとさ千尋・・・」

「山小屋にこもるんでしょ。曲出来るまで。」千尋が分かっているという口調で言つた。

それはアパートにこもり曲が出来るまで逢わないという意味であつたがミチルは考えていることを先に言われてまた苦笑いした。

「ゴメン・・・」

「いいよ。多分ミチルはそうするのが一番集中できるタイプだと思うから。」千尋は笑顔で言つた。

「ありがとう。」ミチルは言つた。

そして二人は駅で別れた。

ミチルはアパートに帰る途中熊田に電話をした。曲を作る事、1週間後のユニオンで熊田のバンドがそれを演奏することを話した。

「熊ちゃん、今日が金曜日でユニオン開催が来週の金曜日の夕方からだろ。もう1週間も無い。スケジュールはかなり厳しいよ。ユニオンの持ち時間は1バンド15分だから一般的な3分30秒の曲をやれるのは4曲が限界だと思う。ライブの時は演奏早くなるとは言つてもね。正直オレも4曲この短時間で作れるかは分からない。3曲はなんとか作りたいと思うけどもしかしたら1曲も出来ないかもしれない。でもベストを尽くす。で、スケジュールを言うね。オレが今からアパートに帰って曲を作る。あさつての日曜中がタイムリミットで。だからそれまでに熊ちゃんも歌詞書いておいて。後で譜割しやすいように言葉多めで。そして作つた曲を月曜日、木曜日でみっちり練習する。新曲を4日で仕上げるのは大変だよ。でもこれがかもしうまくいけば・・・」

「はいっ・・・!!」熊田は泣いていた。

「うん。頑張ろう!」そう言い終わると電話を切つた。

そしてミチルはアパートに走っていた。

ミチルはアパートに帰るとすぐに作曲作業に取り掛かった。まず部屋のカーテンを閉め外からの明かりを遮断した。そしてTVのコンセントを抜き部屋の電気を消し携帯も電源を切った。それからスチール製の安いパソコンデスクの前に座り電気スタンドの明かりのみを灯けた。そして目を閉じて想像した。自分が爆発するようなイメージや雷の電撃を受けた瞬間のようなイメージなどいろいろと思い浮かべた。ミチルの作曲方法はそのイメージ図をノートに数十枚スケッチしそれをヒントに楽器を使いDAWソフトに入力していくものであった。DAWソフトとはDigital Audio Workstationというパソコンで使えるソフトの略でこれを使えばギターやマイクをPCと繋げてPC内に録音して音楽を作成することが出来る。それがミチルの作曲方法であった。ミチルは楽譜がスラスラ読めるわけではなかった。この直感的に音楽が作れるシステムを利用して前バンドの曲も全て完成させたのである。頭の中でイメージした絵や模様または図形の様なものをヒントに曲を作るというやり方は一見普通と変わっているが直感型のミチルにとってはとても相性のいい作曲方法だったのである。

ミチルは前バンドの曲を作った時のように頭の中でイメージを膨らませた。音速でうなりをあげて疾走する紺色のバラクーダに乗って断崖絶壁から飛び降りる自分の感情、全てを焼き尽くす業火の火炎で自分を含め焼け焦げる茶色い大地の温度、通る全てを巻き込みながら灰色の空へ突き抜ける破滅的なハリケーンの風量や巨大な熱量で強く燃える金色の太陽という恒星に溶かされていく自分という塊とその溶けた液体。いろいろなものを想像した。そしてその度にノートにスケッチを書いた。そのスケッチは軽く100枚を超え紙が足りなくなり家にあったコピー用紙やカレンダーの裏紙を使ったりもした。明かり一つの真つ暗な部屋で歩き回ったり頭を抱えたり唸ったり転がったりしながらひたすらスケッチを書いた。そしてそのスケッチを順番に並べそこからエレキギターとエレキベースを使っ

て連想するフレーズやドラムのリズムをひたすらパソコンに入力した。何度も何度も録音し直し既にギターを弾く指の皮は破れ爪は削れ血が出ていた。ギターが一番太い6弦までも切れた。そしてようやくなんとか納得のいくものが3曲出来上がった。ミチルはこれ以上は無理だという自分の中のものを出し切った感覚と今の肉体と精神の限界の様なものを感じた。パソコンから流れる音を確認し終わるとホッとしたのかミチルに急激な疲労感が襲ってきた。ふと机のデジタル時計を見ると夕方17時であった。そしてそれは日曜の17時であった。ミチルは驚いた。一瞬時計を疑ったがその時計が電波時計でありパソコンの時計も同じ時刻であったためそれを受け入れた。ミチルは真つ暗な部屋の中でそんなにも時間が経っていた事に気付いていなかったのである。金曜の夜中から日曜の夕方17時まで約41時間飲まず食わず眠らずで作曲に没頭していたのである。ミチルはそんな自分にかなり驚いたがそれよりも異常な眠気によりいつの間にか眠っていた。

そしてしばらくの時間が流れた後ミチルは突然ハッと目を覚ました。しまったと思い時計を見た。すると時刻は20時であり曜日もまだ日曜であった。

「（良かった・・まだ日曜日だった。）」

熊田との約束にまだ時間があつたのでミチルは安心した。

そしてミチルは自分の体に気持ち悪さを感じた：

それは異常な空腹感であった。

「（目が覚めた理由はこれか・・）」ミチルは思った。

40時間以上何も口にしていない。ミチルは冷蔵庫を開けた。何も無かった。何かコンビニに買いに行こう。そう思いミチルは玄関のドアを開けた。新鮮な冷たい空気がアパートの中に流れてきた。ミチルはドアから出るとその時まるで船で長い航海をした後緑の大地に降り立った旅人のような気分を感じていた。

そしてふと外のドアノブを見ると赤い大きな紙袋が下げてあった。

それは千尋からであった。ミチルが中身を見ると丁寧にラップで包まれた10個のオニギリと3つのインスタントのカップスープとお茶が入っていた。

ミチルはその場でオニギリを3つ開いて食べお茶を飲みほした。

ミチルはそれを最高に美味しいと感じた。そして何か自分の体に熱い血液が流れていくのを感じた。

そしてもう一つ、一枚のサイン色紙が入っていた。よくラーメン屋などに芸能人のサインが書いてあるサイン色紙であった。ミチルはなんだろうと思ってそれを手に取った。色紙には巨大なピンク色の星が色鉛筆で1つ描いてありその大きなピンク色の星の中にM I C H I R U というアルファベットとレコードのマークが書いてあった。ミチルは何かでみたことあるマークだと思ったが思い出せなかった。さらに紙袋の中に1枚の手紙が入っていた。

ミチルへ。

ミチル、ハリウッド・ウオーク・オブ・フェームって知ってる？

これはねエンターテイメント業界で貢献した人を称えるピンクの星型プレートでね、アメリカのハリウッド大通りとかの歩道に埋まってるんだよ。

で、そのピンクの星の中に、活躍した人の名前と、その人が貢献した分野のシンボルマークが書いてあるの。

映画だったらムービーのマーク。

音楽だったらレコードのマークだよ。

これね、25年のキャリアがなくてもOKなんだって。

だからマイケルジャクソンとかジョニー・デップとかキャメロン・ディアスとか最近の有名人の名前もいっぱい埋まってるんだよ。

そしてなんとあのドナルド・ダックも。

じゃ、頑張ってね！

出来るって信じてるよ。ミチルなら。

千尋より。

手紙を見てミチルはやっと思い出した。ハリウツドの観光ガイド本で昔見たことがあったことを。

このピンクの星が描いてあるサイン色紙は千尋が作ったミチルのハリウツド・ウォーク・オブ・フェームであつた。

「（オレがロツクの殿堂は25年とか言つたから・・・）」

千尋は夢の光がバンド解散になつて跡形も無く消えてしまったミチルに何か新たな光を探してあげたかつたのだろ。ミチルはそう思った。

「（ありがとう・・・千尋。）」ミチルは心の中でそう言つてそのハリウツド・ウォーク・オブ・フェームをしつかりと握つた。

そしてミチルはしばらくそのハリウツド・ウォーク・オブ・フェームをじつと見つめた。

ミチルは5分くらいそれを見つめたまま動かなかつた。

そしてふらつとアパートの中に戻り無言でギターやベースを弾いてパソコンに入力した。それはほんの15分くらいの短い時間の出来事であつた。

ミチルはそれからゆつくりとシャワーを浴びて服を着替えた。鏡を見て伸びた髭に気付き髭も剃つた。ミチルが時計を見ると21時30分だつた。ミチルはパソコンの音源をCD-Rに焼きながら熊田の携帯に電話をした。熊田はワンコールで電話に出た。

「熊ちゃん。出来たよ。なんとかね。」

「ミチルさん！ありがとうございます！こつちも準備オツケーです！」

残りのバンドメンバー2人も丁度熊田のアパートに集まっていると

いうことだったのでミチルは音源のCD-Rを持って行くことにした。

熊田のアパートは意外に近かったのですぐに着いた。熊田の部屋を訪ねると部屋にはベースとドラムの子とたくさん散らばったルーブリーフ用紙がミチルを待っていた。

「どしたの？これ。」ミチルは訊いた。

「あの夜からメンバーで集まってみんなで歌詞考えたんです。」熊田が元気に言った。

「そっか。」ミチルはニコツと笑った。

「じゃあこれ。音源。聴いてみて。」ミチルは熊田にCD-Rを渡した。

ミチルは少し緊張したが今回自分が新たに作った曲を聴いてみてほしいという気持ちの方が強かった。それがどう評価されたとしてもそしてCDラジカセからミチルの作った音楽が流れた。

熊田達は3人とも目を見開いてお互いの顔を見合わせた。そして座っているそれぞれの女の子達の強く握られた両手はミチルの新しい曲のパワーを物語ってる様であった。

それからミチルは明日の月曜から木曜までの練習日程などを打ち合わせ熊田のアパートを後にした。ミチルは熊田のバンドが全員で歌詞を作ることは予想していなかった。しかし結果それが全員でオリジナル曲に携わることになり熊田のバンドに何か結束のようなものが芽生えている様にも感じた。そしてミチルはそれがとても嬉しくそして少し羨ましい気もした。

アパートに帰りながらミチルは千尋に電話した。

「曲、出来たよ・・・。」ミチルが言った。

「うん。お疲れ様。」千尋がやさしく労いの言葉をかけた。

「ありがとね。千尋・・・。」

「ううん。でも・・・高くつくぜ、ベイビー。」千尋が言った。

「じゃあ・・・招待するよ。ユニオンに。」ミチルは今自分がい

る道路の歩道から高い夜空を見上げながらそう言った。
「うん。」千尋はゆっくりとそう答えた。

月曜日から木曜日までミチルは熊田のパンクバンド『デスベアー』の練習にひたすら付き合った。3人編成という3ピースバンドのため新曲でも息が合うのも予想より早かった。もちろんミチルのきびしい指摘や激も飛んで熊田も含めかなり泣いたりもしたがそれ以上に1つの目標に全員で向かうという行為は3人の結束をさらに強めたようでもあった。そしてあつという間に金曜日になった。

16時30分。ミチルは千尋と大学の正門の前で待ち合わせていた。
「ミチル〜。」

千尋が走ってきた。

「久しぶり。」ミチルが言った。

「一週間ぶりだね。元気してたかな?。」千尋が少しオドケタ表情で言った。

「なんとかね。」ミチルは少し笑いながら答えた。

ミチルと千尋はそんな会話をしながらキャンパス内を歩いて行った。
「なんか知らない大学って緊張するなあ。なんかみんなこっち見てる気がするし。」千尋が言った。

「見てると思うよ。小さな大学だから他大学の人とか入ってくるとすぐ分かるんだ。」

「え〜そうなの!?」千尋は驚いた声で言った。

「ほら着いたよ。」

二人は棟の階段を昇って会場のイベントホールに着いた。イベントホールはB棟の3階にある。1階は学食で2階が談話室と購買部の

ため人は比較的集まりやすい。ホール中央にはパイプ椅子が並べられ観客はそこに座り自分で椅子の方向を変えそれぞれの部のパフォーマンスを観る。席は100席用意してあったがすでにほとんど埋まっていた。

すると熊田が走って現れた。

「ミチルさん！」熊田が元気に言った。

「おつかれ熊ちゃん。」

「もしかしてこちらは彼女さんですか！？」熊田が少しニヤツとしながら言った。

「うん。まあね。千尋だよ。」ミチルは平静を装って答えた。

「後輩の熊田です！。この度はミチルさんに本当にお世話になりました。なんとお礼を申し上げてよいか・・・。」熊田が丁寧に千尋に挨拶をした。

「ホントに礼儀正しいんだね。熊ちゃん。よろしくね。」千尋もニツコリして挨拶をした。

「はい！千尋さん。こちらこそ！」

「ほら熊ちゃん！発目だろ。用意しないと。」

ミチルがそう言うのと熊田はお辞儀して機材のところに向かった。

熊田のバンド『デスベアー』の出番はは最初の演劇部パフォーマンス開始から30分後となっていた。2年生バンドだから出番は早いということはあるが逆にこの時間は一番人が居る時間でもある。

開演間近になり観客は100人を超え立ち見が出る程となった。規模は小さいがミチルの大学では充分な人数だった。そして演劇部からスタートのパフォーマンスが始まった。ミチルと千尋は立ち見で少し離れた後ろの方から見物した。演劇部はロミオとジュリエットの有名場面をパロディにしたショートストーリー、吹奏楽部はルパン3世のテーマ曲をオリジナルにアレンジしたものであった。どちらもみんなが良く知っているものを題材として1発目に当ててきた。そしてついに熊田のバンド『デスベアー』の出番が来た。

「いいよだね。」千尋が言った。

「うん。」ミチルが力強く言った。

そして『デスベアー』のパフォーマンスの時間が始まった。

「……」

無音だったイベントホールにまず熊田の奇声まがいの高音の叫び声が響いた。これはミチルとの打ち合わせの通りであったが意外な始まりに会場みんなが驚いた。ミチルは当然演劇部も吹奏楽部も1発目は観客の誰もが知っているようなメジャーな曲をもってくるだろうと予想していた。熊田達のバンドが誰も聴いた事が無いオリジナルの曲で対抗するにはそれなりのインパクトが必要と思ったのである。そしてその熊田の高音の叫び声の直後エレキギター、ベース、ドラムの1つになった重低音の小型爆弾のような音が響きまたみんな驚いた。インパクトは絶大であった。そして演奏が始まりまたみんな驚いた。それはミチルの前バンドの勢いを彷彿させるような楽曲であったからである。女の子バンドのためミチルの前バンドの様なヘビーさは無かったが刻みよく鳴る爆竹の様なリズムと要所で利かす小さなダイナマイトの様な音のアクセントは疾走感とグルーブ感では前バンドの曲より勝るようにも思わせた。そしてミチルの作る低音の後に大きな高音を利かせるヴォーカルメロディーは意外にもこの女性ヴォーカルとマッチした。観客は全員がロック好きというわけでもなければ音楽経験者でもない。だから曲に体を合わせてノルなどということは一切なかったが口を開けた状態で一生懸命デスベアーを見つめる表情は観客の反応として十分過ぎるものであった。

そして順調に3曲目の演奏が終わりがけた頃ミチルは千尋に言った。

「ちょっと行ってくるね。」

「どこに？」千尋が言った。

「ステージ。」

千尋は少し驚いた顔をしたがすぐにうんとうなずいた。

ミチルは熊田達のところに歩いて行った。

熊田達の3曲目が終わると同時にミチルはアンプの横に立てかけて

置いてある赤いエレキギターを肩からかけた。ヴォーカルの熊田は一つ隣のコーラスマイクにずれミチルは中央のヴォーカルマイクで観客に向けて言った。

「次の曲がラストです。」

「!!!」

ミチルが歌うのか!? 観客みんなが驚いた。この小さな大学内ではミチルが以前過激な人気バンドを組んでいたのはみんな知っていたし声が出なくなったのもみんな噂で知っていたからである。ミチルが新たに作り上げたこの激しい曲をこのガールズバンドが歌い、そして次にミチルがステージに上がりエレキギターをかついだままヴォーカルマイクに向かって最後の曲を告げたのだ。さっきまでヴォーカルをしていた熊田が隣にずれていることからミチルが歌うのではと軽音サークルを筆頭に会場が少しざわめいた。

そしてそのみんなの予想通り歌うのはやはりミチルだった。

「曲名は『ピンクスター』です。聴いてください。」ヴォーカルマイクでミチルは静かに言った。

「ピンクスター? ピンク映画のピンク?」

千尋の後ろからそう話す小さな話声が聞こえた。ロックの曲にアルコールとセックスとドラッグなどは定番中の定番である。さっきまでの激しいロックの曲の流れからするとそういうエロティックなイメージを感じても不思議ではない。

しかし千尋にはすぐに分かった。ピンクスターとはピンク映画などのピンクではなくピンク色の星マークであるハリウッド・ウォーク・オブ・フェームのことであると。

ミチルは大きく息を吸いながら天井を見上げた。そしてまっすぐ前を見てエレキギターのコードを大きく一つ鳴らした。そしてみんなが驚いた。それは甘いクリントーンであったからだ。まったく音を歪ませてないまるでハープのような優しいクリーンな音であった。ロックじゃないのか!? みんながそう思った。

実際、今回ミチルは最初3曲しか作れなかった。しかしミチルは千尋にもらった手作りのハリウッド・ウオーク・オブ・フェームのイラスト図を見て頭にひらめき15分で完成したのがこの曲であった。それはミチルにとって頭の中になんとなく流れてきた音楽をただ楽器を使い、ただその通りに入力した感覚であつたがミチルはこの曲に関して過不足を全く感じなかった。そんなに音の多い曲ではないがそれはまるで余分な贅肉が無くしなやかで芯がしっかりした筋肉の曲線美を持つ人体の彫刻の様なイメージとしてミチルは感じていた。熊田達にこの4曲目を聴かせた時は本当にミチルが作ったのかと驚かれた。今までのミチルの破壊的で破滅的な激しい音楽と180度異なっていたからだ。しかし楽曲を聴いてすぐに熊田達3人の顔に笑顔が現れた。

観客の驚きをよそにミチルは静かに演奏を始めた。それは多少ロック寄りではあつたが確かにバラード曲であつた。そしてとても甘く切ないメロウな曲であつた。

しかし歌に関してはやはりミチルの声が十分に出ないのは確かだつた。強い高音部分は声がかすれて痛々しいものがあつた。そしてそれは全盛期のミチルを知る者からすれば明らかに劣る歌声であることは明白でありこの歌声を聴いてミチルのことをあざ笑う者もいた。しかしミチルはそう言われることも分かっているこのステージに立っていた。声は完治してなどいかなかったが歌おうと決心していたのである。ミチルは声が完全に出るとか出ないとかそういう事よりもこの曲を歌って今の自分を表現したかったのである。熊田達ももちろんそれに賛成してくれた。そしてかすれて出ない高音部分は隣のコーラスマイクの熊田が練習通り上手くカバーしミチルの声は不安定ながらも歌として聴けるレベルとなつた。

その時ライブを観ていた千尋に一人の大柄な男が声をかけて来た。

その男は左目の下に泣きボクロがあり坊主頭が印象的であった。

「あのスミマセン。君が千尋ちゃんだよね？」男はそう言った。

「あ、オレ杉本って言います。ミチルと前SSBってバンド組んでた・・・。」

「笑ってるリスがかじるやつね！うん知ってるよ。」

杉本はSSBでギターを担当していた。現在大学外の人間とバンド組んでいるためこのユニオンには出てなかったが今回ミチルが熊田のバンドの曲を作ったと聞いて観に来ていたのであった。

「あのさ、ちよつと教えて欲しいんだけどいいかな。あの赤いギターって千尋ちゃんはミチルが今まで使ってるの見た事あった？」

「うん。無いと思うけど。」千尋が答えた。

「そつか・・・。」杉本がポツリと言った。

「あのギター何かあるの？」
不思議に思い千尋は訊いた。

「あの赤いギターはミチルがオレ達と組んでたバンドSSBのサウンドを強化するためにあいつが必死にバイトして買ったものなんだ。ヴォーカルもギター持ってた方が演奏の音は厚くなるからね。」

「そうなの！？全然知らなかった。」千尋は言った。

杉本は演奏するミチルを見ながら言った。。

「あのギター、フライングVって言ってね、アルファベットのVの形をしたいわゆる変形ギターの一種なんだ。最近使ってるアーティストもいるけど発売当初はあんまり形が奇抜過ぎ生産中止になっただくらいだね。でも性能は結構オールラウンドなジャンルに使えるマルチなギターでさ音もオレのギターとカブラナイからミチルはバンドのためにもピッタリだと思ったんだろっね。もちろん最初デザインの奇抜さに嫌がってはいたけどいろんな記事や歴史なんかを見て愛着も湧いたみたいでさ。」

「そんな時オレもミチルと一緒にいろいろバイトしたんだ。魚工場とかチラシ配りとか工事現場とか。オレは自分のギターのローンのためだったけどさ。でもミチルがあのギター買ってそれからすぐバン

ド解散しちゃって・・・そしたらミチルの声も出なくなっちゃってさ。

「もしかしたらオレ達のバンド解散が原因で声出なくなっちゃったんじゃないかってオレいつも思ってたんだ。オレらがあんな理由で解散しようなんて言ったから・・・」

しばらく間を置いて杉本は話を続けた。

「ミチルの声出なくなってしばらくしてだったけどさ、夕方近所の質屋の前をあのフライングVの入ったギターのハードケース持ってウロウロしてるミチルを見かけたんだ。オレらのSSBのステッカー貼ってあるハードケースだったからすぐそれだと分かったよ。結局入るの止めたみたいでホッとしたけどさ。」

「音楽やってる奴が楽器売る時ってさ、もう音楽やんないって決めた時だと思うんだ。オレそれ見てさ、ホント・・・」

杉本は最後の方は言葉を濁した。

「だからミチルが今回熊田のバンドの曲作ったって聞いて正直オレ嬉しかったんだ。そして今さ、ミチルがああのフライングVをまた使い始めたのこの目で見てさ、ミチルまた音楽始めてくれたんだって思ったらさ、なんかオレ・・・」

杉本は少し涙ぐんだ。

観客はあのミチルがバラードを歌うというこの意外な展開に驚くと共に最初は不安定な声のミチルをただただ見つめていたがいつしかその楽曲のメロディとリズムに首でリズムをとっている者も多数いた。

そしてミチルの演奏は終わりすぐに次の順番の演劇部がパフォーマンスを始めた。

演奏が終わりミチルは何か晴れやかな気持ちであった。ギターを置いたミチルのもとに千尋が歩いてきた。

「お疲れ様。カッコよかったよ。」千尋がやさしく言った。

「熊ちゃん達はね。まあオレは声出てなかったけどさ。」ミチルが

苦笑いしながら言った。

「そう？ドナルドよりはいい声だったと思うけど。」千尋が言った。
ミチルは微笑んだ。

それからまた二人でそれぞれの部の残りのパフォーマンスを観た。
そして今年もユニオンは無事に成功という結果を残して幕を閉じた。
午後11時半。最後の片付けも終わり解散となった。

「ミチルさん！ホントありがとうございます！」熊田が深く頭を下げながら言った。

「いいよ。そんな。」ミチルが困った感じで言った。

「とんでもないです。今回ミチルさんが曲作るって言うってくれなかったらあたし達のバンドもどうなってたか・・・」

「オレは1つのきっかけに過ぎないよ。結束できたのは熊ちゃん達バンドみんなの力だと思うし。歌詞みんなで作ったりしてさ。あとはオリジナル、頑張って増やしていかないかね！」ミチルは言った。

「はい！。今度はちゃんと曲も。またみんなで考えて作りたいと思ってます！やっぱなんかあたし一人じゃダメだって改めて思いました。メンバーみんなの力が無いと。みんな集まったのバンドなんだし。」熊田は目を輝かせて言った。

「うん。そうかもね。」

ミチルは何か自分にも言っている様な気もした。

「あのー。」熊田がミチルに言った。

「ちょっと聞いてもらえますかミチルさん。あたしあのバラードすごくいい曲だと思うんです。こう言ったらアレなんです万人ウケする曲だと思うし。だからもし良かったら何か作曲とかのコンテストとか出してみたらどうかと思うんです。もしかして何かの賞みたいのに繋がるかもしれないし。なんて・・・すみません生意気な事言ってます。」

熊田はそう言っ下を向いた。

その時ミチルは思った。熊田も熊田で声を失ったミチルに何か新しい夢の光を探してあげたいと思ってくれているのだと。

「ありがとね。熊ちゃん。」ミチルはニコツと微笑んだ。

「でも賞はさ、もう貰っちゃったんだよね。星1つ。」ミチルが少し笑って言った。

「星1つ!?あの曲はあたしの中で星3つ、いや星5つのランクですよ!誰がそんな失礼な評価したんですか!？」熊田が興奮気味に言った。

それを聞いてミチルと千尋は顔を見合わせ大きく笑った。

その時ミチルは充実感の様なものを感じていた。そしてそれは以前組んでいた過激なバンドで成功した時とは違う充実感であった。音楽で笑ったのは一体いつ振りだろう。ミチルはそう思った。そして今のミチルは何かの賞などよりももっと大きなものを感じた気がしていた。

そしてミチルと千尋は軽音サークルのみんなに別れを言った後イベントホールをあとにした。

千尋はミチルの右手にしっかりと運ばれるフライングVの入ったハードケースをチラリと見た。

キャンパスを正門の方にしばらく歩いていると横の掲示板の方から声がした。

「ミチル。」

それは杉本だった。

「久しぶり。」杉本が静かに言った。

ミチルも同じように挨拶し千尋も軽く会釈をした。

「今日、観に来てくれてたんだってね。」ミチルが言った。

「ああ。いい曲だったよ。バラードのやつも。」

「そっか。サンキュ。」ミチルは答えた。

「また始めるんだろ?音楽。」杉本が言った。

「うん・・・どんな形でもね。」ミチルが少し笑って言った。

「そつか。」

それを聞いて杉本は少しホツとしたような表情を見せた。

「それからさ杉本・・・ありがとね。」ミチルが言った。

「え？」杉本が言った。

「アレ、お前だろ。質屋のオヤジにさ、フライングVを売りに来た奴がいたら買わないでくれとか売らない方がいいって言ってくれとか頼んだの。なんかいろいろモメタみたいだったけど。」

ミチルは続けた。

「さつき千尋にも少し聞いたんだ。」

「オレ実はさ、杉本がオレを見かけたっていう次の日、やっぱりこのギター売りに行ったんだ。いろいろ考えた結果・・・。」

「そしたら質屋のオヤジが言っわけよ。」このギターは何かあるのか？”ってね。変だからしつこく聞いたら教えてくれたよ。朝イチ泣きボクロのある坊主頭がそう言っで頼んできたって。まあ商売だからもちろん断ったって言っただけど。」

「たぶん杉本じゃないかと思ったよ。そんな特徴のある奴なかなかいないしね。でもあの時はバンドもあんな解散の仕方してオレもあつさり別のメンバーに乗り換えてバンド組んだりしてたから・・・何か言い出せなくてさ。」

「あの時さ、お前があのおヤジに言っでくれてなかったらオレ、このフライングV売ってたと思う。」

それはもちろん音楽を辞めていたという意味であった。

「だから・・・ありがと。」ミチルは言った。

「ミチル・・・オレ達があの時解散なんて言・・・。」

杉本が言いかけている言葉をかき消すようにミチルが言った。

「杉本。杉本の新しいバンドのステッカー、今度くれよ。このハードケースに貼るからさ。」

ミチルはフライングVの入った自分のハードケースをポンポンと叩いた。

「・・・ああ。」杉本は少し涙ぐんではいたが大きくうなずいた。

「杉本はこの大学一涙もろいからなあ。」ミチルが冗談っぽく笑いながら言った。

そして別れ際杉本が言った。

「ミチル、今度またギター（エレキギター）教えてやるよ。アコギ（アコースティックギター）しか触ってないんだろ。」

「ああ。頼むよ。師匠。」ミチルはそう言っただけで少し笑った。

そして杉本と別れまた二人は帰路についた。

「師匠ってどういうこと？」千尋が訊いた。

「大学入ってオレにギター教えてくれたのって杉本なんだ。」ミチルが答えた。

「へー。そうだったんだ。」千尋は妙に納得した様な声で言った。そしてふいに千尋が言った。

「ねえミチル、そのエレキギター今日はあたしが持つてあげるよ。」

「え？いやいいよ。エフェクターとか器材も入っただけで重いしさ。」

「うん。だから持ちたいの。」

「は？意味わかんないよ。」

「その重さを感じてみたいわけですよ。『いやあ、男って本当にいいもんですね。』」

千尋がモノマネをしながら言った。

「は？それって水野晴朗のマネ？。映画評論家の。」

「正解！」

千尋はそう言っただけでミチルのギターケースを両手で持った。

「重っ！」

「ほらね。」ミチルが笑いながら言った。

「いや持つ！」

「無理だって。」

「いや絶対持つ！」

■第6章 100万回生きたねこ

12月のある日曜日。その日ミチルと千尋は二人で市の水族館に行く約束をしていた。朝10時にいつもの駅で待ち合わせであった。

8時半頃アパートで用意をしてるミチルの携帯が鳴った。

それは大学の友達の広瀬からであった。

ミチルと広瀬とは以前コンビニのバイトで一緒だった。広瀬は高校時代はラグビー部であったこともあり根っからの体育会系であった。また面倒見の良さからもバイト先でもみんなから頼りにされていてミチルもすぐに広瀬と仲良くなった。

電話は広瀬がインフルエンザにかかってしまい今日のバイトに出られないのでミチルに代わりに出て欲しいという内容だった。

バイトの代役が今日に限って見つからないらしく以前バイトしていたミチルならOKとオーナーが言ったらしい。

「でもなあ・・・予定が・・・」

「頼むミチル！。ホント困ってんだ！。9時から16時まででいいんだ。もうお前しかなくてさ！。でないと店開けられないんだ。ホント頼む！」

「うーん・・・わかった。9時から16時までな。」迷ったがミチルは引き受けた。

「サンキュー！マジ助かったよ。」

ミチルは電話を切って時計を見た。既に8時45分だった。「（やばい。あと15分しかない。）」すぐに千尋に断りの電話をかけたが話中であつたためミチルは今日行けない趣旨をメールで打って千尋に送った。千尋には申し訳ないと思ったが千尋なら分かってくれるだろうとミチルは思った。

ミチルはそのまま急いで代役のコンビニへ向かいなんとか間に合った。

通りに面したその店は日曜のドライブ客などでとても忙しく昼飯の

時間もほとんど取れない程だった。

バイト交代の16時になってミチルは携帯を家に忘れてきていることに初めて気が付いた。

結果的にドタキャンになってしまったのでおそらく千尋から何かメッセージも来ているだろう。

そう思いミチルは急いでアパートに帰って携帯を見た。すると千尋から3件着信があった。

二時間おきに。

メールも来ていた。

ミチルはもしかしてと思って自分の送信メールを見た。すると×マークで未送信になっていた。

「しまった!。」ミチルはすぐに千尋に電話した。

「千尋ごめん。メール未送信になってて。今どこ?」

「駅だぜ。ベイビー。」いつものナイスガイ口調だった。

ミチルは少しホッとした。

「ごめんすぐ行く!」ミチルはそう言うのと急いで駅に向かった。

20分後ミチルは駅に到着した。

しかし探してもそこに千尋の姿は無かった。

「(もしかしてやつは怒ってて帰っちゃったとか。6時間だしな・・・」

「」ミチルは千尋に謝りの電話をかけようとした。

その瞬間、

「16時サンマル分、遅刻犯緊急確保!」

その声と共にミチルは後ろからタックルされた。

千尋だった。

ミチルが驚いて振り返ると千尋が笑っていた。

「もう連絡ないから何かあったのかと思ったよ!」千尋はそう言つてミチルの胸にパンチするマネをした。

「ホントごめん。」そしてミチルは理由を説明した。

「しょうがないヤツだなベイビー。」ナイスガイ口調で千尋が言った。

「怒ってないの？」ミチルが言った。

「まあ確かに退屈だったけどあたしも5時間待たせたこともあったしね。」千尋が笑いながら言った。

「そだね。」

「あら開き直っちゃう？でも結構退屈しのぎにいろいろ考えてたらいい案が浮かんだのよ。」

「いい案？」

「そう。遅刻犯は逮捕5回で実刑に処します。」

「え？」

「ミチルが5回遅刻したら・・・」

「ペナルティとして、言ってもらいます！」千尋が深刻な顔で言った。

「何を？」ミチルが訊いた。

「『千尋ちゃん好きだよ』って。もちろんかわいらしく感情込めてね！。そしたらあたしが『知ってるぜベイビー』ってカッコ良く言うからさ！」

「やだよ！！かつこ悪いなんでそんな・・・。」ミチルは即答した。

「か弱い女の子を6時間も待たせておいて？あゝ寒かったなあゝ駅は。」

千尋はコートの襟を立てて寒がるマネをした。

「てかオレ遅刻しないタイプだし。高校も無遅刻無欠勤だったし。」

「ならいいじゃん。ミチルちゃん、あと4回でペナルティだぜベイビー！」

そう言つて千尋は改札へミチルを引っ張って行った。

「え！？」

「え？って水族館よ。」

「でも水族館17時までだよ。もう16時50分だし。」

「いいからいいから。」

千尋はそう言つてミチルを電車に乗せた。

水族館に着くと予想通り17時で門が閉まり閉館していた。

「ほらね。」ミチルは言った。

「よし門を乗り越えるぜベイビー。」千尋がいつものナイスガイ口調で言った。

「え！？まじで！？」ミチルは驚いた。

「冗談よ。貸しきり水族館は映画の世界でしょ。」

「水族館より海岸散歩したかったの。前、電車から海岸見えたときれいだなあつて。」

そう言つて千尋は水族館のすぐ横の道を指差した。

二人は海岸を散歩した。

辺りはもうかなり薄暗かったが昇りかけた月と外灯のおかげで灯台の方へ続く道まで見えた。

二人は海の見える階段状になっている石のところに腰を下ろした。風もなく海は静かだった。

海に向こう側に見える小さな街のビルや店の明かりはまるで何かまだ発見されていない別の街のようにも見えた。

「なんか・・きれいだね。」ミチルがポツリと言った。

「うん。」千尋が答えた。

15分くらい座っていたがお互いそれ以外何も話さなかった。そして千尋が口を開いた。

「初めて会った日さ・・」

「あたしが猫に話しかけてたの見て正直引いたでしょ。」

「え？まあ・・あの時は少し。」

「だよ。はは（笑）」

「いつもそうなの？」

「うーん。本読んでからかな。」

「何の？」

「100万回生きたねこ。知ってる？」

「さあ。どんな話？」ミチルは訊いた。

「100万回繰り返し生きたねこが最後に愛を知ってからもう次生まれ変わることは無かつたって話かな。うまくいいところ説明でき

ないけど。」

「その本読んでからはさ、なんか道路の野良ネコとかも、もしかしたら何かを探して生きてたりするのかななんて気がしたりしてさ。なんか生きる意味みたいなやつ。人みたいにさ……。もしかして何万回か生きたネコだったりするかもしれないし。・・なんてね。あゝダメだ。こういう訳分かんないことベラベラ言うからダメなんだよねあたし。止めようとは思ってんだけど気抜くといね・・（汗）。男の人ってこういう変なこと言う女好きじゃないもんね。」千尋が笑いながら言った。

「はあゝ。」千尋が大きなため息を一つついた。そして少し黙った。

「あ、人には言わないでよ。変人に思われるから。」
「・・もちろん。」

ミチルはそう答えるとバックからペンを出して千尋の手の甲に文字を書いた。

「ちよつとそれ油性？」

「残念ながら水性。はい出来上がり。」

千尋は書いてある文字を見た。

『この人はミチルの変人です。』と書いてあった。

「ちよつと！何でヘンジンなのよ！」

「ごめん、千尋がヘンジンヘンジンって言うから間違ったよ。貸して。」

ミチルは笑いながら『変人』に大きく×印を入れてもつと大きく『恋人』と書き直した。

そしてミチルは千尋をみつめて言った。

「おれは・・今のままの千尋でいいと思うよ。」

千尋は何も言わずミチルをギュツと抱きしめた。

月だけがさつきよりも高く昇っていた。とても静かな夜であった。

■第7章 Don't look back in anger

その日は12月24日のクリスマスイブであつた。

今年は珍しくホワイトクリスマスという事もありいつもは活気の無い街もクリスマスセール飾りつけで華やかに見えた。さすがにこの日は駅前も活気付いていた。クリスマスソングが流れサンタの格好をしたバイトの女の子がケーキを売っている。クリスマスソングは毎年聴いても飽きないすごい曲だとミチルは前から思っていたが今年のミチルはクリスマスソングが一体どんな歌詞なのかネットで検索してみたりもしていた。

今日ミチルは千尋と駅で22時に待ち合わせていた。

千尋は今日もバイトだったが終わって一緒にクリスマスイルミネーションを見に行く約束をしていたのであつた。

時刻は21時45分だつた。この時間になるともう家族はみんな帰り着いている時間なのかクリスマスケーキのバイトの子もいなくなっていた。デイナーの時間帯なのか人通りも疎らになりかけクリスマス電飾だけが今日を盛り上げようと頑張っていた。

そしてその時ミチルは歩いて駅に向かっていて駅はもう目の前であつた。

「（余裕で間に合うな。）」ミチルは思った。

すると駅の裏路地の方から走って逃げる中学生らしき2人組とすれ違った。

「ほつとけよ。」すれ違いざまにその中学生がもう一人に言った。

ミチルは不思議に思いその路地を覗いた。

すると3人の不良中学生らしき集団に殴られている一人の中学生を見つけた。

ミチルは迷つたが助けに入った。

不意を突かれた3人の不良中学生達は散って逃げた。

「おい、大丈夫か？」ミチルは殴られてうずくまっている中学生を

抱き起こしながら言った。

顔を見ると結構まじめそうな子だった。

口が切れて頬骨から血がにじんでいた。

それを見てミチルは眉をひそめた。

ミチルはさつき街角でもらっていたポケットティッシュを渡した。

「うつつ・・・」中学生は泣くのをこらえていた。

「あいつら・・・僕を見捨てて逃げたんだ・・・」その中学生がポツリと言った。

あいつらとはすれ違った二人のことだろうとミチルは思った。

そう言葉にするとその中学生は声を押し殺しながら涙を流した。

「ああ・・・そういう奴らもいるさ。」ミチルは中学生を見ずに言った。

「通る人はみんな無視で・・・どうして助けてくれたんですか？」

「別に・・・」

「・・・似てたから。かな。知ってるやつに。」

「まあいいよ。それは。オレも用事あるしお前も早く帰りなよ。あ、その前交番行った方がいいかも。」ミチルは言った。

「あ、はい。」

中学生は丁寧にお礼を言い、走ってその場を去った。

ミチルは時計を見た。

「やば。もう５分だ。」

その時だった。

ブチッ！！

すぐに激痛が走った。

振り向くとさっきの不良の一人だった。

見るとミチルのわき腹にナイフが刺さっていた。

ほんの一瞬の出来事だった。

「カッコつけやがって！そういう偽善者が一番ムカつくんだよ！」

「ざまあ見る・・・」不良は薄ら笑いを浮かべると走ってその場から逃げて行った。

ミチルはハツとした。

そしてそれは昔ボロボロのミチルが部室で見たあの後輩田辺の薄ら笑いを思い出させたからであつた。

ミチルは地面に倒れ込んだ。

なんとか出血した場所を押さえはしたが刺したナイフを抜かれたため大量の血が流れ出ていた。

赤い鮮血と路地に溜まった白い雪の鮮やかなコントラストを見てミチルは昔のことを思い出していった。

過去の自分と今の自分。そして千尋のことを思い出した。そしてまたそれらを客観的に感じている自分に気付いた。

「（うつ・・これつてのが俗に言う走馬灯つてやつ・・かな・・・・」

「千尋・・」

意識が薄れていく中ミチルは最後にそう思った。

数分後ミチルは救急車で病院へ運ばれていた。

駅は人が刺されたという事で救急車とパトカーで大騒ぎだった。

千尋もミチルの携帯に救急隊員が出たことから急いで病院に駆けつけた。

ミチルの意識はまだ無かつたが手術も輸血も無事済み命に別状は無いだろうということだった。

ナイフが抜かれていたため出血は多かったものの刃渡りが比較的小さなナイフだった事、早期に発見できた事により出血多量寸前で処置出来たのであつた。

またミチルの両親は実家が遠方という事と雪の悪天候のため到着は明日になるとのことで、病室では特別に許可をもらい千尋がミチルに付き添っていた。

千尋はベットの意識の無いミチルを見つめ、ずっとミチルの手を握っていた。

もう7時間近くなるがなかなか意識は戻らない。

既に時計は午前5時を指していた。

「んっ・・・」ミチルがゆっくりと目を覚ました。

「ミチル・・・」千尋はミチルの手を強く握った。

「千尋・・・」

「オレ・・・」ミチルは途切れ途切れになりながら言った。

「そうよ！助かったのよ。あなたが助けた子がミチルの名前を聞こうとまた戻ってきて。早く発見されたから助かったのよ！」千尋は説明した。

「そっか・・・。いい事も・・・あるね・・・」ミチルは力無くだが笑った。

「バカねもう少しで出血多量で死ぬところだったんだよ！」千尋は涙目で言った。

ミチルは千尋の目が泣き腫れているのが分かった。

「千尋・・・もしかして・・・ずっと？」

千尋は何も言わなかった。そして涙が頬に流れた。

「ありがとう・・・」ミチルは千尋に言った。

ミチルは一度目を閉じゆっくり息を吸ってはいた。

そしてまた目を開けた。

それから少しの間お互い何もしゃべらなかった。

「今日、ごめん・・・。大遅刻だよね・・・」とミチルが口を開いた。

そして少し微笑んで千尋が言った。

「ホント・・・。待たせすぎだよ・・・」

「遅刻・・・5回で・・・アウトだったよね・・・」ミチルが言った。

「そう。だからあと2回しかないよ。5回目はペナルティなんだからね。」

「そっかあ・・・。あと2回もあったか・・・」ミチルはゆっくりと言った。

「あと2回もじゃなくてあと2回しかだよ。」千尋が釘を刺した。

「いや・・・。もう必要・・・ないと思うからさ・・・」ミチルは千尋を見て言った。

「え？」千尋が言った。

ミチルは言った。

「チヒロ……。愛してる。」

そして涙混じりの優しい笑顔で千尋は答えた。

「知ってるぜ ベイビー！」

（終わり）

■第7章 Don't look back in anger (後書き)

最後にちよつと独り言です。もしもよければ読んでください。

第1章「始まりと過去」では主人公ミチルは千尋と出会い今まで誰にも話したことのない自分の過去を千尋に話し結果千尋と付きつことになります。

この章でミチルは誰も知った人がいない大学へ行きたかったのは人との関わりを避けたいという気持ちの中にこんなになってしまった自分をどんな方法にしろ変えたい、今のままではダメだと自分の隅で無意識に思っていたからです。

ミチルは千尋に過去を話したのは千尋といれば自分も変わるかもと思いはじめていたからだと思います。

また後の章で100万回生きたねこの話を千尋がしますがそういう意味でも千尋の中ではミチルとの出会いにネコが関係していたのは感慨深いものという設定です。

ミチルが心を落ち着けるため間奏部分を繰り返し弾くのはループ音が人間に心地よい影響を与えるというのを無意識に感じてるという設定です。

「罰則」を短編で書いた時は音楽やるなら3年間が必要とか思ってたミチルは大学4年にしてたんですが大学4年は就職とか絡んでくるし今回は大学3年という設定に変更しました。

あと洋楽のバンド名がいろいろ出てきます。一応メジャーどころをピックアップつもりですが話を理解しづらくしてしまってたらすみません。

またミチルは大学3年10月までに7、8人の女の子と付き合い合ったと書いてますがミチルは殆んどバンド関係に時間を注ぐので付き合い合った女の子は相手をしてもらえず怒ります。それでミチルは面倒くさく感じ、じゃあ別れようと言うパターンで7、8人という設定です。

第2章「ギターピック」ではミチルは心の拠所である音楽を象徴するお守りの存在のギターピックを失くし、大切に思っていた中学の部活の仲間や大学のバンドメンバーに加え音楽さえも自分の前から完全に去っていく気がします。しかしそれを探す上で失っていた人に対する情熱のようなものを取り戻し千尋と本当に向き合います。お互い強く言い合いをするタイプではないし千尋は最初から心を開いてるので向き合えるかどうかはミチルの心情次第となりましたがこの章ではじめて千尋がミチルと付き合いおうと思った理由が明らかになります。

またこの章でミチルは実際自分の気持ちがよく分かってなく支離滅裂などつつかずに考えをしており人が信じられない自分を「悪」とさえも感じています。実際は人に臆病な気使い屋なだけかもしれませんが。

ミチルはステージ上では過激なパンク系バンドヴォーカルではありませんでしたがそれはパフォーマンスの一環としてでありその他私生活では結構人に気を使う性格でステージ上とプライベートでは全く違うという設定です。なので人との不和などは無縁な設定です。しかしそれが人との程度距離を取ってしまうことへも繋がっているのも事実です。

余談ですが今回千尋のブーツの話が前半少し出てきますがミチルは今まで付き合った彼女達の経験から女の子がブーツをいかに大切にしているか雨で濡れるなどもっての他と思っっていると思っっています。だから千尋が「洗えばいい」と簡単に言った発言に千尋に気を使わせて余計すまない気持ちになったんです。良い革のブーツは実際簡

単には洗えないがもしかしたら千尋ならそんなことは気にしないのかもしれない。

ミチルが千尋に言う「手伝ってくれないか。探すの。」と言う言葉はお察しの通り「紛失中のギターピック」と「ミチルと千尋が探す人生の生きる意味的なもの」のチープなダブルミーニングです。ここではもうすでにミチルは後者の方を言っていますが。

この章で自分の大切なものと千尋の大切なものとで二人の絆が強く結びつきミチルは千尋に心を開きますがギターピックは白でベイダーは黒でミチルと千尋の心の色とはあえて逆になっているのは例えば太った人が痩せた犬を飼っていて痩せた人が太った犬を飼っているみたいな対比的皮肉イメージで現実味を出したかったのだ。

効果はあったかはわかりませんが。

またその2つが最後に混ざることと心が通じたことを表せればと。なんて。

第3章「キャッチボール」ではミチルの元彼女涼子が登場します。ミチルにとっても別格的な存在で鋭い洞察力を持っています。過去ミチルが付き合った女の子の中で唯一ミチルがブラックコーヒーが好きなのを知っている人です。購買部でミチルは涼子に渡されたホットコーヒーの缶がとても熱いので思わず落としそうになりますがこれはミチルが大学で買うのはもったいないという理由から大学ではコーヒーを買わない習慣があり購買部に売っている缶コーヒーが激熱なのを知らないからです。涼子はそれをミチルが知らないことも知っているので缶を落としそうになったミチルを見て別に驚かず大学3年にもなって今更気付いたかという顔をしたんです。でもこの時涼子はこのミチルの習慣に対して「ミチルはあの頃と変わっていない」と良い意味で一種の懐かしさを込めて思います。その後ベンチで「ブラックで良かった？」とあえて聞くのもこの気持ちからです。またこの「変わってない」という言葉はこの章で違った意味で何度かまた出てきますが、千尋と付き合ったことで良い意味でミチ

ルは変わりそれにより自分の知っていたミチルとは違う、もう涼子からは遠い存在のミチルになってしまったことに涼子は無意識的には何かさみしさを覚えています。だからそれを「変わってない」というセリフで無意識に否定しているんです。もちろん涼子はミチルの幸せを一番に願ってはいますが。

また本題とは関係ないかもしれませんが実際レディオヘッドが解散するかという賭けも当てています。

涼子はミチルへ感じていた事を告白し、ミチルは誰にも秘密にしていたはずの自分の心の闇が涼子に及ぼしてしまった影響を知ります。気使い屋のミチルはもちろん涼子にごめんと思います。涼子がミチルに対して感じた『自分の無力さ』という感情を祖母を亡くした千尋に対して何もしてやれないミチルが感じた『自分の無力さ』にも重ね合わせて感じています。

また、この章で涼子は実際今もミチルを想う気持ちがあります。

しかしミチルの幸せを願い応援のメッセージとしてカフェオレのアメを投げて渡します。この章でしつこくミチルのブラックコーヒーの話が出てきますが涼子がミチルへのメッセージとして渡した飴が「カフェオレ」である理由はブラックコーヒーという「ミチルの好きな嗜好」に甘い砂糖とミルクという「女の子の好きな嗜好」を足したカフェオレという飴を渡すことで一言で言うミチルの考え方にプラスして女の子の気持ち（今の彼女千尋の気持ち）もしっかり考えてあげないとダメだよ的な「女の子の友人涼子」としてからのアドバイスメッセージの意味でカフェオレの飴です。

飴をキャッチしたミチルから涼子への返球は心の中で思った「ありがとう」ですが涼子にもそれは伝わっていると思います。

そしてこれ（気持ちのキャッチボール的なもの）によって最初で最後ではあるが涼子とミチルは通じ合ったという設定です。

涼子は今までミチルが付き合った顔やスタイルだけの女の子と違って人柄も良くしかも美人でみんなからの人望もあるいい人です。なのにミチルと付き合って「悲しい恋愛経験」というトラウマを持

ってしまつたのです。

しかしミチルが幸せになることを望む涼子は自分には無理ではあったがミチルの新しい彼女によってそれが叶えられ、悲しくも涼子はある意味トラウマから救われたのかもしれない。

またもしかしたらタイミングさえ違えば涼子がミチルを変える存在になつてたかもしれないのという気がします。

しかし涼子と千尋の違いは何かと言われれば、2年時の涼子は「救つてあげたい」で千尋は「一緒に探す」の違いかもしれません。

3年時の涼子は話の中で「キャッチボール」という一緒にやる行為を例えに出しています。

涼子にもいろいろ考え方の変化があつたのだと思います。

この涼子にミチルが2年時に会つていればミチルはそこですでに変わつていたのかもしれませんが。

しかし逆に言えばミチルと付き合い最終的に今の涼子になつたわけですからやはりこうなる運命だったのかもしれませんが。

涼子の言った「あなたのアンパンマン」という意味はアンパンマンが「自分を犠牲にして他人を助けるヒーロー」であるということからの意味です。みなさんご存知かもしれませんがアンパンマンの話の奥のテーマって壮大なんですよ。

第4章「二人の月」では千尋が祖母の葬式で一時実家に帰つたがその間ミチルは初めて遠くの誰かを想うという経験をします。

そして同じ景色を見てることからも付き合うということは一人ではなく二人であることを改めて実感します。

千尋は実際映画好きな設定なのでSF映画の影響から天体も好きという設定です。千尋の映画の趣味は少し男性的ですがそれも小さいころよく見た祖父の集めていた映画コレクションの影響という設定です。良い意味で鳥類の刷り込みの様に西部劇やSF映画の主人公にダンディズムというか美意識を感じていて人の夢や愛や友情とかいうものを強く信じています。

千尋のよく言う「ベイビー」という言葉は男性的口調をモノマネする時の千尋の口癖という設定ですがこれも先ほどのダンディズムや美意識への憧れからくる誇張表現です。

おばあちゃんからの手紙の内容は決めてましたがあえてミチルには言わないことにしました。

内容はみなさんの想像の通りで合ってると思います。

あと千尋はミチルには言いませんでしたが千尋が少しだけ触れたブルームーンの言い伝えは「ブルームーンを見ると幸せになる」です。ミチル一人の時は月の色が白で千尋と二人の時は銀色なのはちよつとベタかなとも思いましたが大気の関係かやはり白にも見えたり銀に近く感じたりもするんでそうしました。

「後ろには気をつけな・・・」などお気付きかとは思いますがこの『罰則』という話の中で千尋は映画の有名なセリフを引用してよく言います。それは千尋が映画好きな祖父の影響を受け「映画」というものを「人の夢や希望の象徴」的に受け止めているという設定で、だから誰もが知っている有名な映画のワンシーンのセリフをモノマネしてよく話すという設定です。この『罰則』という話の中で、人に好きと言ったことがないミチルに対し5回遅刻した時のペナルティとして「好きだよ」↓「知ってるぜベイビー」↓とカッコ良く言う事は千尋が一番懂れている映画のワンシーンのセリフ（スターウォーズ「帝国の逆襲」でレイア姫がハン・ソロ役のハリソンフォードに言う「I love you」↓「I know」という有名な名セリフ）の再現と掛けて千尋がミチルに内心ホントは言っしてほしいと思っている言葉の千尋なりの照れ隠しの表現です。（千尋は「愛してる」と言ってとはさすがに言えず「好きだよ」にした。）ミチルは千尋からのこのペナルティの提案が出された時「帝国の逆襲」の映画の話を持ち出さないことからスターウォーズは知っているがこのハン・ソロの名セリフは知らない設定です。（ミチルはDVDで観たのはエピソード1〜3で4〜6はTVの洋画劇場。おそらく世代的にもそういう人は多いのでは。ミチルはTV

の洋画劇場で一度は観たことはあるだろうが記憶にはない。観た時スルーしている。)理由は1980年という古い映画であることに加えこのセリフ自体も映画の中で一瞬の出来事であること。ミチルはこの『罰則』の話の第2章でスターウォーズは「男ならみんな知っている」と発言し、もちろんスターウォーズの映画は全作観たことはあります。しかし実際ミチルは映画も好きは好きだがそれよりも音楽的活動の方に一番興味があるので映画に関してはストーリー重視のレベルであり一度観た映画は千尋の様に何度も観ることはなく、千尋の様に映画のセリフや役者など細かい点までは注意して観てはいないという設定だからです。だれしも興味がある分野に関しては詳しいものであり、それ以外の分野というのはあまり知らないものだと思います。この『罰則』という話の中ではミチルは音楽が一番好きで千尋は映画が一番好きという設定です。あと、もちろんミチルと千尋の場合映画「帝国の逆襲」のワンシーンの設定とは男女の役が逆ですが千尋がミチルの事をよく「ミチル姫」「ミチルちゃん」と表現している点(またミチルはちょっと女々しいところもあるし)、千尋が意外に結構オトコギがある点からもこの方がしっくりくるかなと。最終話では結果的に千尋の憧れる映画のシーンの時の使い方とは全く違う雰囲気を使うことになるのですがミチルのセリフは千尋が提案した「好きだよ」ではなく映画の通りの「愛してる」というミチルの中で「好き」よりももっと大きな表現に変わっています。ミチル自体は第4章で「ブルームーンを見ると幸せになる」という意味を知らずにブルームーンを見ているように今回も一度は映画でI love you ↓ I knowのくだりは観てはいるのですが、知らずに無意識に映画と同じレイア姫のセリフになっているという設定です。千尋は今まで好きと言った事が無いミチルが愛してると言ってくれたことが一番ですが自分の憧れる映画のシーンとのシンクロを感じ、ミチルとの心のつながりをさらに強く感じます。

第5章「フライングV」ではミチルが千尋の言動に感化され後輩のバンドの解散回避のために作曲することを決意します。

そしてそれは結果的に声がうまく出ないためもうあきらめかけていた自分の音楽へ再び向かい合うことに繋がります。

声が出なくなった時も音楽をやめようとして質屋に売ろうとしていたエレキギター「フライングV」を再び使い始め最終的に友情がぎこちなくなってしまうていた元バンドメンバー杉本とも友情を取り戻し新たなスタートへと歩き出します。この章では自分のことを気にかけてくれる後輩や友の気持ちというものもミチルは強く感じたりもします。そして以前ミチルが組んでいた過激なバンドの成功で感じていた充実感とはまた違う充実感を感じます。

また熊田のバンドの曲を作るためアパートに帰る時知らず知らず走っているのもミチルが千尋化しかけている証拠です。

あと、ミチルの失われた高音の声についてですが、出ない声はやはり出ないと思います。

もちろん愛の奇跡でステージに立った瞬間元の声を取り戻すのが一番話としてはカッコ良いですが。

かつこ悪くても見てるだけの人にあざ笑われても新しい山に挑戦するミチルに千尋は「カッコよかった」と言っただんだと思います。

そういう山に挑戦的意味でも千尋は「山小屋にこもるんでしょ。」

という表現を使っただけです。（映画ロッキー4みたいな。）

ユニオンについてですが詳しく書きませんでした。が音響器材PA等はいりません。軽音はアンプから出る音のみです。

だからセッティングも片付けも早いんです。

たしかに難しいですが（汗）。

絵や図を見て作曲するミチルの作曲方ですがこれは「図形楽譜」というものの考え方を参考にしています。

だからミチルはピンクの星の図形を見て曲をひらめいたんです。

ミチルが演奏中に杉本が千尋に話しかけてきたのは実は千尋という

人がどんな人なのか杉本は知りたかったのもあるんです。

ミチルは触れてないので千尋は知りませんがその小さな大学の中でミチルは結構有名な人なんです。

その界限でワンマンライブやるくらいのバンドだったんで。だから大学の中ではミチルを変えた彼女がいるとして噂になってたんです。それで千尋が来た時みんなじろじろ見てたんです。ミチルが千尋に説明した「他大学の人が来るとすぐに分かるから」という理由は半分正解で半分間違いとなります。

元バンドメンバーの杉本ですが彼はバンドメンバーの中で一番大柄の筋肉マンという設定です。感じとしては海外のメタルバンドにいるようなプロレスラー体系です。しかしバンド内でも一番涙もろくやさしい性格で解散の理由に「乱闘騒ぎは勘弁」と言ったのは彼です。しかし彼は解散後もミチルのことを気にかけていて彼もいわば自分の解散申し出により心因的要因が何かでミチルの声が出なくなつたのではと罪悪感の十字架というトラウマを背負っていました。ミチルの新たなスタートを確認しそのトラウマから開放されます。

また補足ですが杉本は夕方ミチルが質屋の前をうろうろしてるのを見て夜のバイト明けの朝一でその質屋に行つて店主にもし赤いフライングVを売りに来たやつがいたら買わないでくれと頼みに行く設定です。ちよつと若いな青いなと思うかもしれませんがミチルにこれからギターを教え込んだ思い入れと今までの絆や、また質屋に売りに行くのではという杉本が考えるミチルの性格からの行動予想、杉本の優しい性格の設定からしてこれもありかなと思います。

青春時代つてそういう感情も確かにあつたと思います。あと最後の「水野晴朗」がみんなに分かるか不安ですね。セリフもちよつと説明っぽくなってますが。

「映画つて本当にいいもんですね」で有名な方でしたが2008年に亡くなっちゃいました。

今回は千尋が映画好きという設定なんで迷つた結果使いました。フライングVというギターですが近年使ってるのをよく目にするア

「I ティストは「are you gonna be my girl」で有名なJ E Tのギターの方や斉藤和義さんとかでしょうか。斉藤和義さんの曲は近年栄養ドリンクのアリナミンのCM曲とかでもよく流れていますね。

J E Tというバンド名は知らない方も多いかもしれませんがお笑いのダイノジの方がエアギターで世界一を取った時に使った曲を歌ってるバンドです。そう言えば分かる人も多いかもしれません。この章でミチルが使うギターを選ぶ際、レスポールやストラトキャスターなど王道なギターにはしたくありませんでした。？しつかりとした音が出るギター？マイナーで名前は知らないながら多くの人が一度は何かで見たことがあるのではないかなというギター？形をイメージしやすいギター？章のイメージに合う名前のギターはないかなという点で候補に挙げました。他の候補はエクスプローラー、ファイヤーバードでしたが形をイメージしにくいのと章のイメージにはフライングという名前の方がミチルが新しくスタートをきって羽ばたくというこの章のイメージに合っていると思いこのギターを選びました。

第6章「100万回生きたねこ」ではサラッとはあるが千尋の悩みが浮き彫りになります。

実際千尋は祖父の影響から映画が大好きで自由な発想の持ち主であるが実は今までそれを受け入れてくれる男性にめぐり合っていないかった設定です。第1章内にもあるように元彼には浮気をされフラれています。

今まで付き合った彼氏には千尋の言動が変人的な見方をされる事が多く言ってみれば千尋は男運が良くないのかもしれないかもしれません。

そういう変人的な見方をされることもあり実は千尋は口には出して言わないが実はそれに少し悩んでいて一般論に合う様に自分を変えなければいけないのかとも思っていたんです。

しかし千尋はミチルの「変わらなくていい」という言葉で救われま

す。一応補足で書いておくと、ミチルが1章で千尋にされたのをふまえこの第6章で千尋の手の甲に「変人^{ヘンジン}」という文字を書き、あえてそれを大きな×印で消すのは「千尋はヘンジンなんかじゃないよ。」という意味です。

そしてお互いの絆はさらに強くなる設定です。

ちなみにミチルと千尋の約束でこの章で初めて「ペナルティ」という言葉が出てきました。

一応このペナルティという言葉の日本語訳が「罰則」ということで「話のキー」にもなるのですが罰則というテーマは「悪が裁かれる罰則なんて世の中には無い」と中学時代のミチルが思い込んだところから始まつてる設定のつもりです。

あとこれは後付けですが「罰則」「ペナルティ」という観点からいえば「ペナルティカードやペナルティキックなどという名前の罰則ルールがある競技」の部活にミチルが所属していたのに「悪が裁かれる罰則なんて世の中には無い」とミチルが感じたのも何か皮肉な感じがします。

またなかなか登場人物が増えないこの話ですが元バイト仲間の広瀬が少し登場します。

ミチルはギターを買うためにもいろいろとバイトをしていた話もありましたが知り合いは多い方という設定です。

ミチルは人とベタベタせず冗談なども殆んど言いませんが人を馬鹿にしたりせず言った約束などちゃんと守り責任感があるので人望もそこそこある人という設定です。もちろんミチルはそれに自分では気付いていませんが。そこらへんから広瀬もミチルに電話してきた設定です。よってミチルは軽音サークル以外にも結構交流のある友達はいます。

第7章「don't look back in anger」ではクリスマスイブの夜ミチルは千尋と待ち合わせしていたが駅に行く途中友人に見捨てられリンチされる一人の中学生を見つけます。

ミチルは自分のようにはなつてほしくないと思い中学生を助け、中学生を見送ります。しかしその時リンチしていた一人の不良にミチルは刺されて出血のため気絶します。それは過去のトラウマを再度思い出させやはり過去には勝てないのかとミチルは絶望も感じます。病院に運ばれ幸い一命は取り留め目覚めるがその時刺され出血で気絶してたのに助かったのはミチルが助けた中学生がミチルの名前を聞こうと戻ってきたからだと聞きミチルは過去の呪縛から解き放たれたとも感じて力無くですが笑います。

病院には千尋が付き添っておりそこでミチルは愛というものをそこで生まれて初めて口に出して言うのです。

ミチルが言う「もう必要ないと思うからさ。」も千尋の提案した「ペナルティ（罰則）」とミチルの抱えていた「悪を裁く罰則なんてこの世には無い。」という「罰則」のダブルミーニングです。もちろんミチルは前者の意味で言っていますが。

実は話を考えた時ミチルは結構な重症を負って愛を知るも死んでしまう設定でした。（100万回生きたネコの話をしながら。みたいな感じで。）しかしミチルの死は逆にリアルに欠けるかなあと思い止めました。やっぱ生きてこそかなと。

don't look back in angerという曲はオアシスというイギリスのバンドの曲です。オアシスは世界的に有名で日本でもCM曲に使われていて洋楽ながら一度は聴いたことあるという方も多いのでは。日本人でも一度は聴いた事あるだろう曲は「どれかな」と探してなんとなくこの曲を選びました。そして1章を書いていたわけですが最終章に入った時私を書きたいと思っていた内容とdon't look back in angerの意味がリンクしていると思ったんです。歌の題名なので意味の取り方はいろいろあると思いますがここでは「怒りに振り返るな」という意味で使っています。（思うように進めとかその他いろいろ意味の取り方はあるようですが。）この「怒りに振り返るな」という言葉がミチルが中学時代から思い込んでいた「悪が裁かれる罰則なんて

世の中には無い」という考えへの私の書きたいアンサーを代弁しているように思えました。それで最終章のタイトルにしました。しかし今思えば私もミチルもこの罰則という話のアンサーであると気付かず第1章でこのdon't look back in angerを歌っていたのは何か少し笑える気がしました。最初から自分で答えを言っていたわけですから。まあこの話の中でこの曲の話題を持ってきたのは千尋ですが「答えは実はすぐそこにある」という事をもじったら偶然にも表していたのかもしれませんが。自分のにですが何か感慨深いものを感じました。

最後に、この話の主人公ミチルにとって千尋は無くてはならない存在で千尋無しではミチルは変わる事は無かったと思います。この話も千尋無しでは進まないのである意味主役なのかもしれません。千尋の視点は殆んど書いてませんが。

またこの「罰則」という話はもしかしたらそりやないよという所もあるかとは思いますができるだけ再現可能というかリアルの起こりうるかもしれない範囲の条件で書いたつもりです。(そう思えなかったらすみません。)しかし、もしかしたらこの千尋という存在があまりに善の象徴すぎて一番無さそうな存在になってしまっているのかもしれないというのは否定できません。

でもこの話を書いていて・・居たらいいなあと思いました。千尋みたいな人が。

もしかしたら読んでくれた方の中にはこの千尋の様な人を自分の周りで知っているという人もいるのかもしれませんが。また知るわけないと思う方もいると思います。しかし世の中にはいろんな人がいて、自分がまだ出会ってない人の方が遥かに多いんですから完全に否定はできないと思います。そういう意味では私にもあなたにも突然明

日にでも自分を変える運命的な出会いがあるのかもしれませんが。この話を書いて何かそう言う風に思いました。

ホント最後になりますが私のつたないヘタクソな文章でしたが最後まで読んで頂き本当にありがとうございました。

何か作品を作るというのはやはり「私の中の自己満足にしか過ぎない」のだと思います。結局のところは。

しかし実感したこともあります。

作品を作るということはホント苦しいけど楽しいものだなど。

忙しくなるのでまた書くかどうかははっきりと分かりませんがまた機会を見つけて挑戦したいと思います。

読んで頂き本当に感謝いたします。

紫 暮盤

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1387s/>

罰則 （ 連載版 ）

2011年10月5日23時24分発行